



TOKYO FULBRIGHT ASSOCIATION
東京フルブライト・アソシエーション

NEWSLETTER

No.24
December
2011



フルブライト奨学生としてカリフォルニア大学アーバイン校に留学中の甲斐久実代さんが友人たちとキャンパス内で「ベーク・セール・フォー・ジャパン」を行い、1300ドルもの募金を集めて、赤十字社を通じて東北支援のために寄付した。

(アメリカ国務省人物交流プログラム同窓生による震災支援活動レポートより)



表紙 東日本大震災復興支援のために募金活動をする甲斐久美代さん (2010 U.C.Irvine)

前グラビア 総会・講演会

photo by Hirokazu Takayama

同窓会メンバーから 加島祥造 弓狩康三 2

総会講演会 藤原帰一「親米右翼と反米左翼の間で」 4

総会報告 10

各種報告 11

アンケート特集 女性フルブライターたちは何を考えているか? 12

同窓会活動 台湾での同窓会会長会議に出席して 原田敬美 18

ゆるい組織のジャーナリスト会 小泉成史 19

2011年度財団奨学生冠名リスト/日米教育交流振興財団の状況 20

YKK 研究開発センターを訪れて 吉田育英会 (YKK) 財団冠奨学生 ライアン・シーブルック 21

国会・最高裁を見学して 22

錦秋の鎌倉を歩く 23

セミナー報告 東北被災地でジャーナリストは何を見たか 寺島英弥・藍原寛子 24

日本の技術系博物館は欧米に比べてなぜ貧弱なのか? 小泉成史 26

東北被災地へ義捐金を届ける 原田敬美会長 28

グローバル化する同窓会連携——モンゴルからの報告 今井章子 29

同窓生の短信&掲示板 32

事務局から 36

後グラビア アメリカン・グランティー歓迎会/日本人グランティー歓送会

東日本大震災により TFA 主催のアメリカン・グランティー歓迎会は中止となりましたので、日米教育委員会主催の歓送迎会の写真をご提供いただきました。

親米右翼と反米左翼の間で

藤原 帰一 1982 Yale U.

東京大学法学部卒業。フルブライターとしてイェール大学大学院博士課程に留学。東京大学大学院法学政治学専攻教授



藤原 帰一

私は1982年にフルブライト奨学金でイェール大学に留学しまして、これが外国で学術研究をするきっかけとなりましたし、いろんな意味で現在の研究の柱を与えられた、大きな経験になりました。

私はブッシュ大統領の対外政策に対して非常に強い批判をずっと繰り返してきました。とくにイラク戦争は私は要らない戦争だったと、厳しいことを繰り返して言ってきました。すると、私がフルブライトの奨学金をいただいていたことを発見した方が、アメリカに留学までさせてもらっていて、いったい何だ、恩知らずではないか、とおっしゃった。「ああ、そうか、アメリカの恩を仇で返しているのかな」と、自分の気持ちに引っかかるものがあったんですが、それで言えば、もう少し話は面倒くさいですね。

というのは、私は帰国子女でして、小学生のとき、父が東京銀行に勤めていたためにニューヨークの郊外に3年ばかり住んでいました。ですから、アメリカのことを日本人の目で見て、日本のことをアメリカ人の目で見ると、何かちょっと目線が定まらないようなところがありました。私から見れば、日本もアメリカもそれぞれに、素晴らしいところ、狭い見と、両方とも抱えている。大変面倒くさい立場だなと思ったこともありました。

だけど、アメリカが諸悪の根源だと思ったことはただの一回もありません。むしろ、いろいろな意味で、自分にとって重要な存在であるアメリカというのをどう考えていくのかが、自分にとっての課題だったんです。とは言いながら、私がどんなことを考えていても、これは典型的な反米左翼だと、いろんな方にご指摘いただいて、「ああ、そうか。俺は反米左翼だったのか」と思い知ったことでした。

これをもうちょっと遡りますと、私の恩師で東京大学法学部の教授を長らく勤めました坂本義和という先生がいます。坂本先生もやはりフルブライターでシカゴ大学で学ばれました。先生は日本にお帰りになると、ただちにジャーナリズムにいろんな形で原稿依頼を受けるようになって、活躍をされることになる。この坂本義和先生のことを、同じくらの年の方が、「フルブライトでアメリカにまで行って

お世話になったのに、なんで反米になっちゃったのかね」ということをおっしゃった。

坂本先生も、じつは生まれたのはロサンゼルスなんです。お父上は宣教師で、また東亜同文書院の先生もされる、つまり教育者であり、宣教師であるという方でした。ですから、アメリカで生まれ、中国の上海で育つという経過をたどられたんです。英語は上手ですし、先生をご存知の方からは、日本人離れていると言われてきたタイプの人で、アメリカの中に入り込んでるような人です。しかし、ご存知のように、坂本先生もベトナム戦争をはじめアメリカの冷戦期の外交政策について、非常に厳しい批判を繰り返された方なんです。そして、坂本先生も「反米左翼」という言葉を当てはめられてきました。

坂本義和先生は共産党に入党したことがない、同世代では比較的珍しい人です。そればかりか、彼が最初の論文で取り上げたのは、エドモンド・パーク。イギリスの保守主義の代表的な思想家で、パークについて書くことを通じて、フランス革命を保守主義の視点から見ていく、また保守主義の視点からフランス革命のあとから出来上がったウィーン体制というものを考えていくという、これが坂本義和の出発点だったんです。どうひっくり返っても、左翼という言葉とはまったく相容れない側になります。

しかし、坂本さんも反米左翼と呼ばれるようになったわけですね。アメリカに反対すると左翼に決まっています、左翼はアメリカに反対するに決まっています、この反米左翼という言葉って何だろうと

いうことが、ずっと気になっていました。

日米関係の大きな悲劇は、親米リベラルというグループが極めて弱いことだと年来考えておりました。リベラルはどちらかといえばアメリカに反対するほうに動いていく。もちろん社会主義者、マルクス主義者たちはアメリカに否定的。それから、アメリカに賛成しているが、その理由が、外務大臣だった重光葵の言葉を使って言えば、「アメリカは、日本の番犬様だ」。つまり、日本の防衛のために米軍を使っているわけであって、価値とか制度とかいった点では、簡単に言えば、アメリカは邪魔という人たち。この両極端に分かれてきたことが、日米関係の大きな不幸だというふうに、私は考えてきました。

私自身は間違っても反米左翼だと自分では思いません。私がイラク戦争について書いてきた文章の実に多くは、たとえば『フォーリン・アフェアーズ』がイラク戦争が始まる前に発表していた文章と、とても似ています。イラクで戦争をすることで、アメリカは国際的な信頼も失うだろうし、イラク人もアメリカ人も多く死ぬことになって、しかも現実政治から見れば、アメリカの対外的な抑止力も低下する。いいことなんか何もないというふうに、私は思ってきました。しかしこういった議論が日本では反米左翼というところに分類されてしまうところが、不幸だと考えるわけです。

日本のリベラルに定着しないアメリカ文化

こうした日本人の態度を作ることになるのが、アメリカの日本に対する占領政策であります。占領政策は、現在から見ると意外なほど、実に多くの日本人から積極的に支持されました。ジョン・ダワーの名著『敗北を抱きしめて』という本の中には、戦争に負けたあとの日本人が、いかに熱狂的にアメリカの影響力を歓迎していくのかというプロセスが書かれています。このときには、アメリカに対する支持の幅は、非常に大きいんですね。さらに、これは政党党派を横断しています。戦犯指定を受ける人たちの中にも、嘆願書に、「私はアメリカ的な民主主義を心から支持していた」という、読んでいるこちらの方が恥ずかしくなるような文章を書く人もいました。また左翼の方になれば、監獄から釈放された共産党の幹部が、米軍は解放軍であるという声明を出したことで知られているように、アメリカを中心とした占領が、日本の革命のきっかけを作るのだというふうに、平和革命路線といわれるものですが、野坂参三などは本気で信じ込んだわけですね。

日本で民主化を進めていこうとすれば、戦前の政

府を担った者の大半をパージしなくちゃいけない。じつはドイツよりも日本に対する占領政策の方がはるかに厳しいもので、パージの規模も最初はずっと大きかった。しかし、それをやっちゃうと政府を運営する人がなくなっちゃうわけです。で、占領政策が緩やかなものに転換していきます。これはじつはイラクでアメリカが当面したのとまったく同じ問題です。バース党や軍を全部排除したら、イラクの統治ができない。イラクの場合には本当に排除してしまったから、政府がない状態を招いてしまった。日本の場合には、早い時期から戦前戦中の政治勢力を取り込んでいきます。

この過程で、当初は「米軍は解放軍だ」と言っていた共産党をはじめとする左翼勢力が、振り落とされていきます。占領政策が味方になると考えた革新勢力が、ゼネストに向かって非常に強い圧力をかけていく。これに対して、2・1ゼネストの中止令が出た。これは大きな事件なんです。占領政策を利用しようとした左翼が、それどころかむしろ追い払われる方向に転換していく分水嶺になります。そのあと、中国共産党が中華人民共和国を建国する。このときからワシントンのアジア政策と日本に対する占領政策が明確にリンクして、日本における左傾化を阻止するという方向に、49年の暮れごろからは、ほぼ明確になっていきます。

占領が終わり、戦犯指定が解除されると、それまでまさに戦犯の中心であった人たちが、次々にアメリカとの関係の中心を担うことになっていったのです。岸信介がいい例ですが、岸ばかりでなく、たとえば満州国で活躍した星野直樹とか、いろんな人たちがアメリカとの関係強化に向かうことになります。

また、マスメディアは大学と並んで、パージが行われなかった。軍に協力したグループがほとんどクビになっていない。新聞社の中で旧軍とのつながりもあった正力松太郎は、アメリカとの関係の中心人物として、50年代からむしろアメリカ政府が強力に利用するようになっていきます。

アメリカから見れば、これはよく分かることです。なんといっても少ないリソースで安定した政府を作らなくてはならない。彼らを野に放ってしまえば、まさにイラクで起こったように、元は反米右翼だった人たちが、占領下でも反米勢力として活躍する可能性があります。というわけで、議会制民主主義を心から信じるというわけでは全くない人たちが、アメリカの不思議な友達に浮上することになります。

もう片方のいわゆる革新勢力の側については、まず、第二次大戦より前に、ある程度の教育を受けて、

それなりのポジションについていたグループがあります。彼らの受けた教育の中心になっていたのは、アメリカについての研究ではなくて、圧倒的にヨーロッパの研究です。ドイツの影響が強い人もいますし、フランスの影響が強い人もいます。伝統的な日本の知識人のスタイルは、ヨーロッパの文化に触れることが第一であって、「アメリカなんて、軽くて軽くて」というのが基本だった。

たとえば若いときの小林秀雄の文章を読んでも、小林は映画をよく見る人間なのに、映画についてははるかに書こうとしない。映画は下等なんですね。映画について書くときは、ジャック・フェデーのことは書いてもいい。フランスだから。キートンについて書くというのは、少し恥ずかしい。つまり、アメリカ文化の影響は非常に大きいんですが、インテリの文化として定着していたわけではない。これは非常に重要なことです。丸山眞男はフルトベングラーの指揮するSP盤のレコードをよく聴いていて、どこで演奏していたのかといったことをよく知っている。だけど浅草に映画を観に行かない。

このヨーロッパの文化を中心に教育を受けていく機関の中核にあったのは東京大学法学部、文学部です。法学部はもともと官僚養成の機関として作られたものであって、官僚国家のモデルとしてドイツを選んできたこともあって、ドイツの影響が圧倒的に強い。アメリカ研究は常にマイノリティーだった。文学部ではフランス文学の研究が中心になっていた。アメリカはどこにもない。

このような教育を受けた人たちが占領期の日本にいるときに、アメリカが文化の泉だとは見えない。彼らは自由主義思想の影響はもちろん受けている。丸山さん、大塚久雄さんもそうです。ただ、丸山について言えば、『日本政治思想史研究』は、日本の思想の中にも西欧文化におけるような政治の概念があったんだということを、荻生徂徠をベースにして考えることが中心の本です。西欧とは何かといえば、間違いなくヘーゲルなんですね。荻生徂徠の中にヘーゲルを発見するといえはうぶん荒唐無稽ですが、そこに論理の展開をもってくる。ただ、彼にとってアメリカの政治思想という話は出てくるはずがない。あるいは大塚久雄にとって、社会科学とは、何よりもマックス・ウェーバーであり、カール・マルクスです。そしてマルクスとマックス・ウェーバーを絶妙に、しかも異様に混交させるところから、大塚史学、共同体の理論ができあがったことはご存知の通りです。

このようにヨーロッパに対する憧憬が非常に強い

人たちから見ると、アメリカは文化の果てでした。米兵に強い親近感を抱いた占領下の日本国民とは違って、アメリカ軍の統治に対するいわば文化的な興味というものは、ほとんどない人たちです。

リベラリズムといわれる考え方——権力に対して自由を主張し、自由な政府を作っていくとする考え方、それは本来は共産主義とは正反対の立場になるはず。自由主義者たちの中でも、どちらかといえば社会民主主義に近い立場をとる人であっても、共産主義とは徹底して闘争するのが、むしろ普通だった。たとえば、イタリアにノルベルト・ボッピオという人がいます。ちょうど日本における丸山眞男に相当するような、誰もが尊敬し、自分たちの世代の思想を支配してきた人ですが、しかし、決定的な違いがあります。ボッピオにとっては共産主義こそ自由主義の敵でした。彼は福祉国家の指導者であり、社会民主主義者と呼んでもいいでしょう。だからこそ共産党の独裁は、彼にとっては容認できないものでした。

これと丸山眞男を並べると、極端な違いに気がつきます。丸山の場合には、日本では自由主義の勢力は弱体である。封建制、天皇制国家の名残がまだ日本には強い。個人の自由という概念が定着していない。そのような中では、社会主義勢力と自由主義勢力が手を結ぶことは必要なのだ、という考え方。これは丸山が何回となく繰り返す議論であります。

さあ、ここで、日本の自由主義者たちは何を求め、何を標的にしていたんだろう？ 第二次世界大戦のさなかであれば、それは軍だったということになるでしょう。だけど戦後、軍はいませんね。じゃあ、何が標的になるか。それがアメリカです。アメリカが非常に大きな権力を独占している表象として現れることになっていく。そして、アメリカに対して日本国憲法を擁護するという行動が、革新勢力の議論の旗印になっていきます。

これはちょっと微妙な問題があります。日本国憲法の草案が占領軍の幹部たちによって作られたもの



であることは否定できないでしょう。敗戦と占領という経験があることによって、初めて日本国憲法が成立したということは、これは明らかだ。どう考えても日本国憲法は日本人が作った、日本人のための憲法だといえるようなもんじゃありませんでした。しかし、この憲法に対して日本国内で大きな抵抗がなく、むしろ、とくに憲法9条などは熱狂的な支持を浴びることになる。

ただ、考えてみれば、自分の力で民主的な憲法を作ることができないというのは、あまり嬉しくないですね。そこで、大塚都合のいい物語が生まれることとなります。つまり、いまアメリカは憲法の原則を押し破って、日本を再び戦争への道にいざなおうとしている。われわれは憲法9条を高く掲げて、戦争に追いやるようなアメリカの政策に修正を迫るべきだ、アメリカに対して憲法を守るという言説が生まれることになっていきます。

この言説の中で、平和主義という概念と、民主主義という概念が、不即不離の関係に立つことになる。もっと言ってしまうと、日本の平和主義という考え方が、国際関係における平和を作ることが目的だったのかどうか、きわめて疑わしいと私は思っています。真の目的は軍の影響力を削減することであり、アメリカの影響力を減らすことの方であった。

日本では、平和主義というのは日本の国内政治の問題であって、日本の外の戦争に対しては著しい関心の欠如が見られます。朝鮮戦争についての日本国内の報道を見ると、もちろん連日報道はされているけれど、当時、護憲平和という立場も強く叫ばれていました。しかし、朝鮮戦争と護憲平和というものをつなげるものが驚くほど少ない。なによりも平和主義というのは日本の国内政治の問題としてのみ議論されていたのです。

半世紀も変わらぬ日本の意識構造

映画で「ゴジラ」をご覧になった方も多いと思いますが、最初の「ゴジラ」は反戦・反核映画なんですね。ゴジラはずっと太平洋の下に埋もれていた恐竜が核実験で突然変異をして現れてきた、という存在。このゴジラは、一気に東京を壊すのではなく、ちょっと歩いてはまた海に戻り、ちょっと出てきてはまた海に戻る。波状攻撃で空襲と同じなんです。そこで映し出される東京の光景は空襲でやられた東京の映像とまったく同じなんです。広島、長崎の被爆の映像ともぴったり重なり合うものがあります。映画の中で、ゴジラについて国会で議論される場面が出てきます。与党はゴジラについての情報を公開しよう

としない。核問題をめぐってアメリカと対立することを恐れているからです。野党が情報の公開を求めて隠蔽を告発する。政府はアメリカの言いなりだと、大声を立てて批判するんです。なんかどこかで聞いたような話ですけども、この映画が作られた53年、54年の段階で、すでに見ている人がうんざりするようこうした構図が固まってしまう。

なんでこうなってしまうのか。理由は簡単で、アメリカと日本の間に圧倒的な力の格差があるからです。だから日本とアメリカが協力をするといいても、対等な国の同盟であるという考え方はもともと、生まれません。そこから出てくるのは二つの考え方です。一つはアメリカと一緒にいたら自分が望まない戦争に巻き込まれるんじゃないかという、巻き込まれの恐怖。もう一つは、日本はアメリカに見捨てられたらもう安全は保てないという、置き去りの恐怖。日本で左翼勢力が強かった時代には、置き去りの恐怖よりも、巻き込まれの恐怖の方が、はるかに強く感じられていたのです。

このような状況で、日本政府はアメリカとの安定した関係を維持しながら、他方で選挙に勝たなければならぬという、面倒な問題に直面する。対米関係でみれば、アメリカからさまざまに要求されることを受け入れれば、国内で支持を失う材料になってしまう。だからできる限り日米合意については、全貌を明かさないようにしておく。野党のすることは、日米の秘密合意を暴露するということで、沖縄とかが有名ですが、じつは50年代からずっとこれが繰り返されているわけです。最初は日本の再軍備なんです。日本再軍備構想について、保守政党が隠している、「本当はもう合意したんだろう」とかいったやり取りがずっと繰り返されていて、情けないことに、これがずっと普天間まで続いていくんです。

今日、昔話をたくさんしましたが、それには理由があります。これをお聞きになって、「え、最近とどこが違うの？」とお考えになる方が多いのではないのでしょうか。この話のつらいところは、この構図が延々続いてしまっていることなんですね。もちろん違いは出てきます。違いの一つは、日本が経済大国になったことで、アメリカはそれまで以上の負担を日本に求めるようになった。バーデン・シェアリングです。日本側はバーデン・シェアリングを全部受け入れたら、野党にいじめられる。だけど、受け入れなければ日米関係のほうが壊れてしまうというジレンマに立たされることになるわけです。

その中で、日米の安定した関係を図るための努力が行われたのは、おそらく1960年代ごろだと思

ます。60年代、ライシャワー大使のころ、この人は、このような日米関係では支えられないということに非常に早い時期に見て取った人物だった。ライシャワーの後を継いだアレクシス・ジョンソンもやはり、そうだったんです。そのために、一つは日本のマスメディアとのコンタクトを積極的に進めていきます。また日本の一般市民、学者とのコンタクトなども積極的に進めていく。それまでは、米軍あるいはアメリカ政府と日本国民との接点なんて非常に少なかったんですが、これを変えていく。

フルブライト・プログラムにも表れているような、日米関係の、言ってみれば誇らしい場面の原型となっていくのは、多分、下田会議以後の日米関係の拡大ではないかと思えます。このころは、珍しく親米リベラルという数は決して多くはないグループが、日本で緩やかに育っていった時代だった。たとえば東京大学で言えば、教養学部教養学科。教養学部はもともと一高をベースにして作られた新しい学部ということもあって、ヨーロッパ研究が主体となっている本郷とは違って、アメリカ研究に重点をおいて研究を進めてきました。そこで教鞭をとられた中屋健一先生、あるいは本間長世先生といった皆さんは、下田会議から現在に至る、言ってみれば親米リベラルの、僅かだけれど非常に重要な流れとして活躍されることになります。

「当たり前の日米関係」構築に必要な人事交流

話が突然、バーンと飛んじゃいますけれども、民主党政権ができて、日本にはどういう変化があったんでしょうか。これまでは、日米関係の中心にいたのは、アメリカでは共和党、日本では自民党。しかも、日米関係者は日本語ができる日本通といわれるアメリカ人が中心になる。

日本通にとって、このときの課題はなんだったか？ それは60年代からライシャワー、アレクシス・ジョンソン、ずっと後のマンズフィールドが恐れていた、日本のド・ゴール化、あるいは日本の対米自立化であった。日本の国内世論では対米自立化が強い支持を受けていることは、もちろんよく知られていました。このようなグループが日本の対外政策で影響力を持つようになれば、困ったことになる。ただ、このことは国務省がそう考えたわけでもないし、大使館がそう動いたということでもない。そういうことを考えた日本通がいたというだけのことで。たとえばマイケル・グリーン、いま日米関係を一手に牛耳ってるあの人物、日本語が上手で、日本のメディアの誘いを決して断らない人ですから、彼

を通じて議論が流れていく。このとき国務省は決して日本の対米自立化を恐れるという状況だったわけじゃない。むしろ、鳩山政権の方向についてわからないことが多いから、一生懸命情報を集めているという状況だった。

この状況で、私は馬鹿なことをしたもんだと思っていますけれども、ゲーツ国防長官は日本訪問という方針を進めます。馬鹿なことをと言ったのは、この問題でアメリカが少しでも圧力をかけるということになれば、沖縄の態度は一挙に硬直することは分かりきっていたからです。それをなんとか日本に事前に伝えようと、カート・キャンベル国務次官補、この人は国防次官補を務めたことがある人で、国防総省にも信頼がある人ですが、彼がなんとかことを穏便に収めようと訪日しますが、当時の岡田外相は、「嘉手納でいいじゃないか」ということを言う。ここで国防総省と岡田外相の立場があまりにも離れているものだから、キャンベルは交渉を投げ出します。ゲーツがやってきて、強い圧力をかける。その結果、沖縄では大変な反発が起こることになる。それをアメリカが見て、軌道修正します。

次のポイントでミスしたのは日本側だったと、私は思います。オバマ大統領が日本を訪問したとき、日米首脳会談を行って、日米の協議という方針をアメリカ政府が打ち出します。これはアメリカ側から見れば、明らかな譲歩でありました。ここで理由はよく分からないんですが、オバマ大統領が日本にいてサントリーホールでアジア政策の非常に重要な発表をしている、まさにそのときに鳩山首相は外遊に出てしまった。大統領が演説をした後で、もう一回首脳会談をする計画があったと、私は聞いています。これはもちろん首相がいなくなったから、流れちゃったわけで、ここでは鳩山さんの方が流したということになります。

その後菅政権が実現して、ここで日米関係が一転することになります。外相は前原。アメリカ側は鳩山政権との間の関係を失敗したということをよく分かっている。だから、菅政権が樹立された段階で、日米関係の安定を図ります。日本側も鳩山の失敗を見ているから、菅政権で日米関係の安定化をしていきたい。そのために対立する案件については争わない、先送りします。原則論については前原も菅首相も全面的に同意するという立場をとる。

「そんなことはない、尖閣はどうしたんだ」とお考えになるかもしれませんが。いえいえ尖閣はその表れでした。日本のマスメディアは、仙谷官房長官が中国にひれ伏して頭を下げたのだと解釈していま



す。とんでもない間違いです。頭を下げた相手は中国じゃない。アメリカなんです。

前原外相は、領土・領海問題については、自民政権、あるいは鳩山政権よりも強い態度をもって臨むという立場を当初からイメージしていました。他方、中国は今年のASEAN拡大外相会議をはじめとして、南洋における中国のいう核心的利益について、極端に強硬な主張を繰り返しているという状況にあった。正面衝突する可能性は非常に高かった。このとき中国漁船が日本の艦船にぶつかってきたということに基づき、船長を逮捕する。

オバマ政権は、ブッシュ政権よりも中国に対してはるかに警戒的です。海洋での中国の活動にも批判的なのですが、同時に、中国との間に紛争が生まれて、同盟国のために艦隊を送るような事態は絶対に避けたい。なぜかという、かつて台湾海峡でミサイル危機があったとき、実際に第七艦隊を送りますが、そのために1年半の間、米中間でコンタクトがまったくなくなってしまったからです。米中間が徹底的に亀裂する状況は避けたい。しかし、中国に対してはメッセージを送りたい。さあ、どうしたらいいだろうか。

そこで出来上がった「仕掛け」が、クリントン国務長官が出した声明です。日米安全保障条約第5条に、尖閣諸島は含まれている、という声明。普通、領土・領海の問題があるときはアメリカは立ち入るまいという行動をとりますが、日中で争いがあるときに、はっきりと日本の肩を持つのは、これが初めて。それで、「あっ、これは何かあるな」と思ったんですが、案の定でした。この声明が出された直後に船長が釈放されます。理屈はもう明らかですね。つまり、アメリカ側のメッセージは、「安保条約第5条は網羅すると言って、尖閣に手を出したらうちが相手になるんだよと、中国をちゃんと脅かすから、その代わり船長を釈放してくれ。危機の長期化は避けてくれ」と。

このときのクリントンとの会談の前日、前原は非

常に強硬な発言を行っています。ところが、翌日のクリントン国務長官との会談で、一転して方針が変わってしまうわけです。アメリカに対して、自立してやるという国内向けの政策を言う政治家が、現実政治の壁にぶつかると、いまの菅政権のように、親米という立場にコロッと変わる。

この態度は、かつての反米左翼、親米右翼の時代とほとんど変わりはない。そして、アメリカの政策に否定的な議論をする人に、左翼というレッテルを貼る態度というのも繰り返されている。

このとき日本が中国に譲歩して船長を釈放したのは、マスメディアとしては仙谷が中国に頭を下げたからという話でなければ、理解ができない。前原は対米協調派で対中強硬派なんだから、中国に頭を下げるわけではない。仙谷は売国奴であり、反米左翼だからという論理です。

こうした日本人の考え方があるのは、結局のところ、外交についての議論が親米右翼、と反米左翼という二つの両極端、しかも占領期の早い時期に生まれた考え方が、亡霊のように今でもわれわれの考え方を縛っているからではないかと思えます。

「え、親米右翼と反米左翼の二つだけというのは、おかしいじゃないか」と言われる方もいるでしょう。たしかにこの二つだけではありません。その中で、フルブライト・アソシエーションは、その二つとは違う立場での日米関係を作ってきた団体です。先ほど、アメリカの悪口を言い続けてきたと申し上げた坂本義和先生は、フルブライトでアメリカで学ぶ機会を与えていただいたことを、いまにいたるまでずっと感謝し続けて、アメリカに行くたびにフルブライトゆかりの方々、存命中はフルブライト上院議員にお目にかかって、ご挨拶をしてきました。あるいは、マンズフィールド・フェローシップというのがあります。これはアメリカからお役人をインターンとして日本の政府にお招きして、日本の官庁で働いてもらうというプログラム。もう十数年続いています。その結果、日米両政府の間で信頼される官庁の皆さんが、このプログラムから作られてきました。

考えてみれば、メディアの世界が一番遅れているのかもしれない。親米・反米という伝統的枠組みとは違う、よりヒューマンな、ある意味では、当たり前の日米関係というものが、別のところから作られている。それはマンズフィールド、あるいはフルブライトのような、人と人の行き来に立脚したものではないかと思えます。

最後にちょっとだけ希望を残して、今日のお話を終えることにしたいと思います。

2011年6月23日、学士会館で東京フルブライト・アソシエーションの総会が開催された。原田会長代行が、ご出席の皆様へ感謝と御礼を述べられ、審議に先立ち次の2点について報告をした。

1. 東日本大震災に伴う、東北地区同窓会への義捐金の活動報告

2011年3月に財団からの推奨があり、TFAが活動の一端を担うことになった経緯が説明され、6月23日時点で約60万円集まったことが報告された。義捐金は原田会長代行が直接東北同窓会に持参する予定。(最終的には100万円を超えた。28ページ参照)

2. フルブライト60周年記念事業について

2012年5月25日(レセプション)、5月26日(シンポジウム)の開催に向け、実行委員会を立ち上げて議論をしている。シンポジウムでは、ノーベル賞受賞者、根岸英一氏に基調講演をしていただく内諾を受けている。シンポジウムの会場は津田塾大学のご厚意から津田ホールをお借りすることができ、実行委員会は様々な活動が順調に推移をしているとの報告があった。

3. 審議事項について新事務局長松島氏より「2010年度会務報告書」の説明がされた。例年通り活発な活動をしてきたが、残念なのが2011年3月14日予定の「アメリカン・フルブライト・グランティールセプション」が東日本大震災後の交通規制の為中止になったことだ。

次に審議事項に入り、小川新監査役が①決算報告書の説明をした。過去の会費請求の支払い分を繰り入れたため、収入が予算4,500千円に比し、6,120千円と増収になった。節約と収入の増に努めた成果もあり、繰越額が16,993千円となった。②2010年度会務報告、③監査報告、④2011年度予算の説明を終えて、場内に原案通りの承認を求めたところ、満場一致で承認された。

⑤2011年度TFA人事案では、以下の人事案が提出された。佐藤会長が昨年退任され、副会長のフクシマ氏が今年退任されたとの報告がされた。原田会長代行が、昨年退任された佐藤氏の後任を務められたが、任期までの1年を“会長”に昇格すること、また副会長文野氏が新任され、前会長の長坂氏が顧問に就任された。事務局長大野氏が4月23日に退任し、新事務局長に松島たかね氏が就任すること、以



上人事については、原案通り了承された。

4. 「東京フルブライト・アソシエーション会則改正」についてアルムナイミーティングス委員長福田氏から説明された。満55歳以上の会員については、終身会員として、5万円を年会費に代えて支払うことを認めるという新しい会費納入方法である。異議なく原案通り承認された。

5. 「その他」については、原田会長から以下の説明があった。まず、ファンレイジングの件である。2012年フルブライト・プログラム60周年記念事業を錦の御旗にしながら、ファンレイジングを進めていくために現在準備委員会で方針について議論をしている。少し長めのスパンの長期戦で、おそらく目標額も社会情勢を考慮すると控えめで進めていく考えだ。ふたつ目は、日米交流チャリティ・ゴルフ大会である。今年度は、東日本大震災後の社会情勢を考慮し検討中との報告がされた。近々、チャリティー・ゴルフ実行委員会を従来通り設立し、実行委員会で開催について決めていきたいと説明され、2011年度の総会が終了した。

続いて、懇親会がアルムナイ・ミーティングス委員長福田氏の司会で始まった。原田会長が挨拶をされ、講師の藤原氏にフルブライト・オリジナルネクタイを贈呈した。藤原氏の講演が盛況で、懇親会の間中、藤原氏の周りには人の輪ができていた。お食事をされる暇がないのではないかと余計な心配をしてしまうほどだ。アメリカン・グランティールの方も含めて、久しぶりに会われる方、また、めったに会われない方との楽しいお食事をしながら歓談された。そして、TFA顧問南原氏の中締めで元気のよい声が響き渡り、2011年度の総会・講演会そして懇親会が終了となった。

2011/2012年度役員(敬称略)

- 会 長：原田 敬美
- 副 会 長：千本 倅生、竹内 洋、住田 良能、森本 泰生、金田 新、文野 千年男
- 監 査 役：小川 富田
- Alumni Meetings 委員長：福田 学
副委員長：神戸 伸輔、岩澤 知子
- Hospitality 委員長：島田 道子
副委員長：外池 滋生、山田 真之、大倉 健太郎、松島 たかね
- Publicity 委員長：松尾 秀助
副委員長：今井 章子
- Foundation Liaison 委員長：原田 敬美
- 顧 問：渡邊 宏、行天 豊雄、橋本 徹、南原 晃、有馬 朗人、長坂 健二郎
- 事務局長：松島 たかね

2010年度会務報告

- 10.06.09(水) 2010年度第1回東京フルブライト・アソシエーション定例役員会(於アルカディア市ヶ谷)
- 10.06.09(水) 2010年度総会・講演会・懇親会(於アルカディア市ヶ谷)
[講師] 江端貴子氏(衆議院議員・文部科学委員会委員)
[出席者] 会員・家族50名、招待者11名、合計61名
- 10.06.17(木) 米国人ニュー・グランティールのための国会および最高裁判所見学ツアー
[国会：江端貴子衆議院議員][最高裁判所：古田佑紀判事]
[参加者] 米国人ニュー・グランティール12名、関係者6名、合計18名
- 10.06.18(金) 2010年度第1回日米教育交流振興財団理事会・評議員会(於フルブライト・ジャパン会議室)
- 10.07.02(金) 第20回セミナー(於フルブライト・ジャパン会議室)
[講師] 藤原和博氏 教育評論家(前・杉並区立和田中学校校長)
[テーマ] 「日本の公教育・私の挑戦」
[出席者] 会員他36名
- 10.07.17-19(土~月) 日光・宇都宮・烏山ツアー&ホームステイ
[参加者] 米国人ニュー・グランティール他6名、同行者2名、計8名
- 10.09.03(金) 第21回セミナー(於フルブライト・ジャパン会議室)
[講師] 我謝京子氏 ドキュメンタリー映画監督・ライター記者
[テーマ] NYの日本人女性のChoiceを映画に
[出席者] 会員他32名
- 10.10.05(火) フルブライト・プログラム60周年記念事業準備会(於フルブライト・ジャパン会議室)
- 10.10.18(月) 第35回日米交流チャリティ・ゴルフ大会(於戸塚カントリー倶楽部)
[参加者] 136名
[募金額] 450万円
- 10.11.04-07(木~日) 世界フルブライト・アソシエーション第33回年次総会(ブエノスアイレス)に会員2名参加
大野照事務局長と福田学Alumni Meetings委員長
- 10.11.19(金) 第22回セミナー(於フルブライト・ジャパン会議室)
[講師] 梯久美子氏 ノンフィクション作家
[テーマ] 「戦争」を書くこと
[出席者] 会員他20名
- 10.11.23(祝) 第7回鎌倉ウォーキング・ツアー
[参加者] 米国人ニュー・グランティール・同伴者6名、会員・家族17名、計23名
- 10.11.29(月) フルブライト・プログラム60周年記念事業第1回実行委員会(於フルブライト・ジャパン会議室)
- 10.12月 NEWSLETTER Vol.23発行
- 10.12.15-17(水~金) 台湾フルブライト同窓会会議
原田会長参加、【参加国】台湾、シンガポール、オーストラリア、ドイツ、アイルランド、日本
- 11.01.26(水) フルブライト・プログラム60周年記念事業第2回実行委員会(於フルブライト・ジャパン会議室)
- 11.02.24(木) フルブライト・プログラム60周年記念事業第3回実行委員会(於フルブライト・ジャパン会議室)
- 11.02.25(金) 2010年度第2回東京フルブライト・アソシエーション定例役員会(於フルブライト・ジャパン会議室)
- 11.03.14(月) 2010年度アメリカン・フルブライト・グランティールレセプション(於アルカディア市ヶ谷)
→ 東日本大震災後の交通規制のため中止
- 11.03.25(金) 2010年度第2回日米教育交流振興財団理事会・評議員会(於フルブライト・ジャパン会議室)

2010年度決算・2011年度予算比較表

	2011年度予算	2010年度決算
I 収入の部		
会費	5,500	6,120
寄付金	0	1
受取利息	0	5
募金手数料	567	567
P C 賃貸料	120	120
広告料収入	300	300
雑収入	0	0
当期収入計(A)	6,487	7,113
前期繰越	16,958	14,831
収入合計(B)	23,445	21,944
II 支出の部		
給料手当	1,600	1,627
水道光熱費	150	147
放費交通費	200	104
通信費	1,100	933
地代家賃	376	76
事務用品費	50	45
会合費	420	557
会議費	150	6
奨学生費	300	246
印刷費	1,000	863
什器備品	50	0
修繕費	50	0
消耗品費	40	0
倉庫料	30	19
支払手数料	10	8
図書購入費	50	9
雑費	30	0
損害保険	4	4
保守点検費	42	42
予備費	800	0
当期支出合計(C)	6,452	4,986
当期収支差額(A)-(C)	35	2,127
次期繰越(B)-(C)	16,993	16,958

女性フルブライターたちは何を考え どんな問題を抱えているのか？

—同窓会活性化のために—

■問題提起として■

パブリシティ委員会では、2009年からフルブライターへのアンケートを通して、同窓会活動の活性化を考える特集を掲載してきた。最初は「若手フルブライターは何を考えているか」と題して、2001年以降に留学した9名から回答を得た。次は「地方の同窓会活動はどうなっているか」がテーマだった。

今回は、「女性フルブライターたちは何を考え、どういう問題を抱えているか」を尋ねるべく、15人の方々にアンケートを送り、8人の方から回答をいただいた。突然のお願いであり、また、「女性」と限定してのアンケートだったため、戸惑われた方もおられたかもしれない。

昨今、女性の地位向上、女性の活用など、日本でも Women empowerment に関する話題を聞かない日はない。一方で、男女雇用機会均等法の施行から四半世紀が経ち、一律の「女性」という括り方に抵抗を感じる方もいるようだ。確かに最近の雇用情勢などを見ると、若い世代では性別よりも若年層の就職難の方が切実かもしれない。

しかし、これまで女性フルブライターの考えを直接集めた記録はTFAにはなく、それならば60年の歴史の中で各方面で活躍されるリーダーを輩出してきたフルブライト活動においてこそ、女性の多様な声を聞かせていただくべきではないかと考え、いくつかの質問を用意した。なるべく幅広い世代からのお答えをいただきたいと努力したつもりである。

質問は次のような項目だ。

(同窓会活動について)

- 1) あなたはこれまでフルブライト同窓会活動にどのくらい参加してきましたか？ (例：グラんティイ歓迎会、チャリティー・ゴルフ会、セミナーなど企画別に。あるいは、役員として、もしくは年平均〇回程度、イベントに参加、など)
- 2) 女性フルブライターは2010年現在、1444人を数えます。しかし、このうち同窓会に加入しているのは908人にすぎません。TFAの役員も26名中、女性は4名にとどまっています。このよう

な傾向をどう思われますか？ (男性フルブライターも約6000名余のうち、同窓会に入会している人数は半数の3000名強にすぎない)

- 3) 今後のフルブライト同窓会活動において、女性会員の参加を活性化するためには、どのような工夫や企画が必要だと思いますか？

(フルブライト体験と女性)

- 4) 米国でのフルブライト体験によって、女性の在り方や役割についての貴方の考え方はどのように変わりましたか？ (あるいは、変わりませんでしたか？) そのきっかけとなった体験や出来事があれば、ぜひお聞かせください。

(女性フルブライターとキャリア形成)

- 5) あなたは日本の職場や家族関係で、フルブライターであるが故の特別視をされたことはありますか？ ポジティブな面でも、ネガティブなことでもかまいません。体験をお聞かせいただければ幸いです。(例：やりたい仕事に就けた、昇進した。女性の地位向上に努めることができた。思うように仕事が見つからなかった。など)
- 6) 国際会議や海外勤務など、国際的な活動において、自分が日本の女性フルブライターだからこそ感じた体験はありますか？ それはどんなことですか？
- 7) ご自分がキャリアを追求していく中で、女性フルブライターであることはどのように影響・作用していると思いますか？ あるいは、そのような影響はないと思われますか？ 自由にお書きください。
- 8) これからの女性フルブライターにキャリア形成上のアドバイスをするとしたら、どのような言葉をかけたいとお考えですか？
- 9) そのほか、女性とフルブライト体験、フルブライト同窓会活動に関して、ご自由にコメントしてください。

以上のアンケートを行った後、問題点をさらに掘

り起こす目的で、何人かにインタビューを行なった。

■幸せな初期留学生■

はじめに、1950年代、60年代という初期に留学したフルブライターの回答からご紹介しよう。日米安保条約が紛糾の中で改定され、駐日米国大使としてライシャワー氏が着任した時期である。

1956年に氷川丸で留学したフルブライター35人の中に3人の女性がいたが、その一人が湊晶子さんだった。東京女子大学社会科学科助手だった湊さんがフルブライト奨学金の選抜試験を受けて留学を志したのは、戦中の千葉高女時代に爆撃で重傷を負い、「子供が産めない体」と医者に言われて、研究者として生きよう、爆弾を落とされたアメリカに行って「和解」しようという気持ちからだ。クリスチアの湊さんは神学研究を目指したが、当時の受験分野に神学がなく、まずオレゴン大学大学院に留学(西洋史)、翌年、念願のホイートン大学大学院神学部に移った。修士を取得した後フルブライト・シニアスカラールとしてハーバード大学神学部客員研究員となった。

「同じ氷川丸にフルブライターとして乗っていた湊さんと知り合って、留学中に結婚したんです。夫はミネソタ大学を経てハーバード大学でPhD(有機化学)を取得しました。思いつけず子供にも恵まれ、研究者としてばかりでなく、アメリカでのお産からも文化の違いを教えられ、たくさんの生きた西洋史を学びました」(湊さん)

朝日新聞の2008年5月24日付け神奈川版に「それは港から始まった——氷川丸の記憶」という8回連載のコラムの第1回が掲載されている。タイトルが「甲板の恋 人生の船出」。湊さん夫妻の物語だ。「当時は女性のアメリカ帰りなんて肩肘張っていて、お嫁に行

けなくなる、と言われた時代です。湊は、『救ってやったんだ』と言ってました」

そのご主人は44歳の若さで脳出血により他界された。二男一女を育てられたのは、ご主人が書き遺した多くの著書が教科書として使われ、その印税のお陰だったという。湊晶子さんも東京基督教大学、東京女子大学で働き、後に東京女子大学学長を8年間務められた。

「大学でフルタイムとして50年間仕事をしてきたので、同窓会には思うように出席できませんでしたが、フルブライト30周年のセンチメンタル・ジャーニーに参加し、ジョンズ・ホプキンス大学での討論会、フルブライト上院議員訪問、『日本でのグランティー立ち上げの募金』贈呈にも同席しました。同窓会の役員も数年間務めさせていただきました」(湊さん)

湊さんは2010年3月に東京女子大学学長を退任し

それは港から始まった

水川丸の記憶

1859〜開港150年へ

甲板の恋 人生の船出

1953(昭和28)年7月、シートル定期航路に復帰した氷川丸。日本郵船歴史博物館提供

「水川丸は人生の始まり。私を生かすの思い。出たのがあつて、あの日。花婿と誓いを。さうして。夕日が甲板を照らしていた。」(安部晶子)

機嫌の氷川丸は1950(昭和5)年に新造し、米留学の米国の3年後に、シートル航路に復帰し、船中、時代にもまれ、病弱母、空乏は有機化学の博士号を得た。あきらめていた子どもも生まれ、19年暮れ、家族を休めた。約10月、44歳の時、湊さんは脳出血で急逝した。未だ10歳だった。今でも落ち込む水川丸の甲板を思い出して、湊さん夫妻の物語を振り返る。

●氷川丸で知り合い、数日後、晶子さんに寄り添うようになった湊さん＝1958年9月、太平洋上

●東京女子大学長の湊晶子さん＝東京都杉並区

た後、それまでも関わってきたNPO法人「ワールド・ビジョン・ジャパン」(チャイルド・スポンサーとして途上国の教育・社会環境のレベルアップを助ける)の国際理事に日本・アジア代表として就任。国際会議での活躍に多忙な日々を送っている。

「まもなく80歳を越えますが、国際会議や国際電話会議で通訳なしに明確に日本の立場、自分の意見を伝え、意見交換できるのは、若き日の留学体験が今に生きているわけで、感謝しています。フルブライトによる留学生活がなければ、女性としての私の人生はなかったと思います。研究者夫婦のあり方、女性キャリアのあり方など、多くを学びました。日本女性としての誇りを持ちつつ、異文化体験を有効に取り入れ、今日があると思っています。どこに参りましてもフルブライトであったことは高く評価されます」

神学の分野や学長の世界は圧倒的に男性社会だ。湊さんは仕事の上で男女差を意識したことはないが、やはり意見が絡まって苦しんだことはある。「妥協はしないが、寛容さをもって時を待つ」のが湊流。

「ちらし寿司にのせる錦糸玉子を作るのに、よく混ぜないと白いまだらができるし、混ぜすぎると泡が立ちます。そのときグラニュー糖を少し入れると、きれいにできるんです。男と女の社会も、絡まったものをほぐすグラニュー糖が必要で、私は何度もそれを体験しました」

たしかにTFAという組織も集まるのは圧倒的に男性(それも年配者)が多い。そこに女性が加わってグラニュー糖的な役割を果たしてくれば素晴らしい。さらに先導的な役割を女性陣が発揮するようになれば、TFAは大きく変わるだろう。

湊さんとほぼ同時期(1957~62年)にYale Universityに留学した岩男壽美子さんは、「フルブライト体験によって、女性のあり方や役割について考え方が変わったか?」という質問に、こう答えている。

「サイフのひもを握っている日本女性に比べて、当時のアメリカ人女性(主婦)の経済的自由度の低さに衝撃をうけたことが、『The Japanese Woman: Traditional Image and Changing Reality』(Harvard Univ. Press)という本を書くことにつながりました。つまり女性の在り方や役割は固定観念に捉われず多面的に捉える必要があるということです」

また、「フルブライトであるが故にポジティブであれネガティブであれ特別視をされたことはあるか」という問いに対しては、「特に宣伝したことはあ

りませんが、否定的にとられるようなことは想像し難いです」と回答された。慶應大学教授として長年教鞭をとる傍ら、男女共同参画問題に取り組み、2000年にはニューヨークで開催された国連特別総会「女性2000年会議」の政府首席代表も務めた岩男さんは、これからの女性フルブライターへキャリア形成上のアドバイスとして、「活躍の場は日米に限らず、世界中にあることを忘れないでください」と述べておられる。

安(田中)威子さんはフルブライターとして1962年~64年、University of Wisconsinに留学し、68年から71年に再度留学、薬学でPhDを取得。フルブライト体験は、「私の一生を左右したほど重要な体験でした。帰国後、国の男女共同参画政策にずっと関わってきています。同窓会活動にも副会長として10年間務め、40周年のセンチメンタル・ジャーニーを企画・実施して渡米した。

国際的な活動においても、1999年に「ICWES 11 (11th International Conference of Women Engineers and Scientists)」という国際会議を日本で初めて、副会長として開催した。

ご自身、女性フルブライターであることはキャリア追及でどう影響・作用しているか、との問いに、「平均的な日本人より精神的に自立している。日本社会はまだ『甘えの構造』が強い。想像力が不足している。最近ですらいじめの構造が強すぎる」と述べておられる。

「日本の男女共同参画の歩みは実にのろい。基本法の成立は1999年。女子差別撤廃条約はまだ批准されていない。そのための国内法整備(例、民法改正)が進まない」と言うのは、国連NGOとして35年以上行動してきた自負があつたことだ。第三次基本計画でようやく「科学技術・学術分野の男女共同参画」を施策化することができたという。「日本社会は男女共同参画後進国です。ウーマンパワーで国を作り直しましょう」と呼びかけている。



■ 70年代から80年代の留学体験 ■

1978年から79年にUniversity of California, DavisとGeorgetown Universityに留学した千野境子さんは、新聞記者という立場もあって、「私はもともと『女性』ということはどういう意識を持っていません。ただ、機会はすべて平等であってほしいとだけ思っていました」と言う。女性であるが故のプラス、マイナスは計りようがない、というのだ。

だから、「キャリアを追求していく中で、アメリカ体験はその後の私にとって決定的と言ってもよい経験に入るかもしれない。それがフルブライト留学に負っている部分が大いことを考えれば、女性フルブライターであることの影響、作用ということになるのかもしれないが、こういう形の設問(「キャリア追求の中で女性フルブライターであることはどのように影響・作用しているか?」)は、私の意識とは少し違うように感じます。私見ですが、このアンケートは『女性』を意識しすぎではないでしょうか。戦後間もなくならばともかく、ガラスの天井はあるにしても、大幅に門戸開放され隔世の感があります」と述べている。ただし、と続けて、「社会には多くの側面があるので、これもひとつの意見かもしれませんが」と、アンケートの質問側を救ってくれている。

千野さんはその時代、アメリカで男女に関係なく、人間として皆がのびのびと、あるいは果敢に生きていること、しかもそれが当たり前であることに強い感銘を受け、成功も失敗も含めて人生とはこうではなくてはと、元気をもらったと言う。時あたかもアメリカではアフーマティブ・アクションなどで職場の何十%は女性を登用すべしとされ、メディアでも女性キャスターが増えた時代だった。

「その後、特派員としてフィリピンやシンガポールに滞在しましたが、とくにフルブライターであったことを意識したことはなかったし、相手がフルブライターであるか否かも分からなかった。ただ、職場(産経新聞社)には前後にフルブライターが何人かおり、それがなければつながりがなかったであろう先輩後輩とも交流があったのは、良い経験だったと思っています」(千野さん)

1985年にUniversity of Marylandに留学した佐原亜子さんは、総合研究開発機構の広報部職員だったが、2年間の留学を終えて帰国後、研究員に昇格した。その意味ではフルブライト留学がキャリア上、プラスに働いた例だろう。

「当時、フルブライト・プログラムという名のある留学プログラムに選ばれたことで、私への評価の高まりを感じました。留学が終わり復職したとき、事務職から研究職に昇進しました。また、当時勤務していた組織(総合研究開発機構)では、私の留学以降、女性職員の海外留学・派遣システムが始まり、4人が留学しました」

女性フルブライターであったことで国際的な活動をする上で、変化はあったかという質問に対して、こう答えている。

「アメリカでの大学院生活を体験したことで、海外の研究者との共通の意識を持てたように思います。外国人も交えた仕事をするときの自信につながりました。フルブライトということでは、米国からのフルブライト留学生から親しみを持たれました」

そして、「自分の能力への誇り、自信となったので、いろいろな仕事に挑戦することができました。しかし、同時に、自分にとって不十分と思われる職に就かなければならなかったときは、不満が増したという側面もあります。過剰なプライドもあったのだと思います」と率直に述べている。

1985年当時でも、「まだフルブライトってあったの?」という反応があり、フルブライト・プログラムが過去のものとの印象が一部にあったようだ。いかにいえばアメリカ留学が以前ほど特別なものではなくていったということだが、その後、バブル経済の崩壊後、アメリカにおける日本研究はかつての高まりを失っていると聞く。アメリカのアカデミアでは中国研究の方にシフトしており、日本研究の資料が少なくなっているという。

現在、日本の大学では海外留学のプログラムを持たないと生き残れないという危機感があり、交換留学や単位互換制などアメリカの大学との連携は盛んだが、大学側も親も就職のことを考えれば、1年以上の長期の留学は望んでいない状況だという。

同じ1985年から87年にかけて大学院生としてSmith Collegeに留学した大井幸子さんが、アメリカにいたときに、日本では男女雇用機会均等法が施行された(1986年)。帰国した87年はバブルの真最中で、途中入社した日本の生命保険会社では女性総合職の一期生だった。89年から2007年まではアメリカ企業でニューヨークに滞在。

「スミス・カレッジでの留学中は女性のリーダーシップを学びましたが、日本に戻ってからの適応の方が難しかったです。米国ではフルブライターは尊敬されますが、日本の実社会ではそれほどはあり

ません」(大井さん)

日本の企業組織内では権力闘争でいじめられ、「早く偉くなりたい」と思ったそうだ。「日本の会社社会では、まだトップが古い考えで、女性に不親切」と言う。若くて有能な女性が子供を持った場合、仕事と育児とが大変だから、女性は連帯してもう少し住みよい社会にしたい。女性フルブライターでそういうことを考えている人は多いと思う、と大井さんは言う。

■ 90年代以降の女性フルブライターの体験 ■

鮎川ゆりかさんは1995年～1996年、Harvard University, Kennedy School of Governmentに留学。帰国後、WWW ジャパン気候変動特別顧問として活躍されているときに、フルブライト同窓会のセミナーで、「気候変動に日本は立ち向かうことができるのか」というスピーチをした。現在は千葉商科大学政策情報学部教授として環境問題を講じている。

「フルブライト体験と女性」の項目で、鮎川さんは、「(アメリカでは)女性としてだけでなく、人間として、またそれまでの活動成果を評価基準にしてくれる。それが日本とは大きな違いだと思った」と答えている。ただ、鮎川さんの場合は、40代後半になってからの留学であり、家族たちを説得するためにはフルブライターとしてハーバード大学院に留学するということが大きなポイントになった。さらに、日本でやりたい仕事につけたというその点では、Happyだったかもしれない。

諸隈紅花さん(2005年～2007年 Columbia University)の場合は、「フルブライターであることは残念ながら、仕事でとくに評価されることはなかった」という。そして、「私の場合はとくに留学前と後の仕事の断絶があるのと、日本社会が閉鎖的なせいもあり、なかなか公正な評価はされにくいと思う」と回答している。

「私は大学で考古学をやったのですが、就職のとき、それではご飯がたべられない。コンサルタントとして働きましたが、体を壊して長期休暇をとりました。建築の保存・活用に関する研究をやりたくてフルブライトでコロンビア大学の建築大学院に留学しました。アメリカでは、たとえばニューヨークでいえばブルックリンの古い使われなくなった砂糖工場を、時代を反映した産業遺産として保存しようといった活動が盛んです。自治体にはそのためのLandmark Preservation Committeeなどがあって、公共性があれば私権を制限できます。日本ではまだ

まだ経済原則が優先して、保存活動は低調です。

アメリカで建築・都市研究のシンクタンクで1年間リサーチャーとして働いた後、帰国しましたが、建築関係の会社では経験がないということで、なかなか就職できませんでした。フルブライターと言っても、『それって、何?』という反応だったり、せいぜい、『へえ、すごいね』で終わってしまいました」(諸隈さん)

建築設計会社に契約社員として勤めたが、学んだことを活かす機会はほとんどなかった。「ただ一度、ホーチミン市の再開発を手がけると、古いものに配慮した都市計画のガイドラインを作りました。どのくらい役に立ったか分かりませんが」と諸隈さん。日本でも近頃は産業遺産として工場などを保存する気運も高まりつつあるようにも思うが、諸隈さんの志望職種としては「10年早すぎた」のかもしれない。

■ 鉄は熱いうちに打て ■

フルブライト同窓会の活動を活性化するために何をすべきか、という設問に関して、湊晶子さんはこう言う。

「単なるパーティーだけでは、夫婦同伴の場合もあり、誰がいつのフルブライターかがはっきりしない。来ても自分の居場所が見つからない、という声を聞いたことがあります。私は氷川丸で行った仲間が集まると、すごく盛り上がった経験があります。同じ体験をシェアしている人たちが、それを土台にして、異なる分野で仕事をしてきた同士がいろいろ話し合うことに意義があると思います。レジャーの会ではなく、ある目的のある集まりで熱く語り合う機会があってもいいのではないのでしょうか」

岩男壽美子さんも、「同窓会活動の内容が会員にとってもっと興味深いものになれば、性別に関わりなく、もっと参加者が増えるのではないのでしょうか。プログラムがマンネリ化しているように感じます」と。

安(田中) 威子さんも、「まず女子OG会をスタートしてはどうですか? 若い女性たちが男女共同参画を必要と感じていないことが問題です」と提案する。

佐原亜子さんは具体的な提案をしてくれた。「広報誌に女性を多く出すこと。女性同窓生のプレゼンスを高める」——わが「Newsletter」誌へのご意見。「女性を対象としたプログラムとして。たとえば、フルブライターには大学研究者が多いと思いますが、アカデミアの中で研究者としてキャリアをつむ

ために、女性が苦勞している点の意見交換ができる場を設ける。同様に、フルブライターが多くいると思われる職種として、高校の英語教師、ジャーナリスト、あるいは組織の管理職など、それぞれのキャリアの中で女性が直面している問題も考えられる」

さらに、「現役世代の関心を高めるためには、同窓会員に向けた内輪の活動だけでなく、今日の社会に働きかけるような活動も行う必要があるのではないのでしょうか。教育活動としては、若者たちが内向き志向になっているということですが、たとえば大学だけでなく中学、高校などでもセミナーやワークショップを開催するなど。また、同窓生が勤めている組織で人材を求めることがあったら、人材募集や就職・ボランティアさがしのためのジョブ&ボランティア・サーチができる情報提供システムづくり。さらに、若い世代や現役フルブライターの研究テーマや仕事最前線の紹介は、社会の動きの先端を示すものとして、関心もたれると思います」

東京では講演会やセミナーが開催されているが、地方都市ではそのような機会が少ないので、著名フルブライターの講演を地方で開催することに力を入れる、という提案は、去年の地方同窓会へのアンケートの回答にもあった。アメリカン・センターでは著名アメリカ人講師が来日すると、地方都市を回るイベントを行っているの、それに倣うやり方だろう。

大井幸子さんは昨年(2010年)9月にTFAが行なった我謝京子さん(1991年 U. of Michigan)のセミナー「NYの日本人女性のChoiceを映画に」を聴いて、おおいに感ずるところがあったと回答している。母親の問題、子供の問題、キャリアアップの問題などをドキュメンタリー映画にした話が刺激になったという。

「フルブライター女性のなかで日本人としてグローバル化の最前線に立つ、さまざまな分野で志を持つ人たちの話を聞く機会があれば参加したい」(大井さん)

ニューヨークに20年近く住んでいた大井さんは、ニューヨーク在住の日本人フルブライターの会にも参加したことがある。また、フルブライターだけではなく、教育関係の留学経験者を集めた会にも出て、「時事問題について活発に討論していました。フルブライター同士はすぐに打ち解け、よい議論に参加できてよかったです」と述べている。

留学していたスミス・カレッジの日本人同窓会が「スミス・カレッジ・ジャパン」としてあり、カレッジの学長が来日したとき、ルース駐日米大使の

夫人にも来てもらってパネル・ディスカッションを開催。大井さんも幹事役・パネラーとして参加した。

同じような同窓会は諸隈紅花さんが留学したコロンビア大学でもあって、年総会にはパーティーを催している。諸隈さんは慶応義塾大学時代、交換留学でダートマス大学に1年間留学したが、ダートマス同窓会もバーベキュー大会などをやっているという。

佐原亜子さんとのインタビューで一番盛り上がったのは、「お帰りなさいプロジェクト」だった。帰ってきたばかりのフルブライターを集めて、アメリカでの体験を話してもらう。「夢みたいだったわ」「こんな素晴らしい体験をした」というふうに、話したくて仕方がない熱い時期に、新旧同窓生を聴衆にしてセミナーの変型版を催しては、という。鉄は熱いうちに打て、ということだ。これは来年度にでも実現させてみたい。

今年度からはオリエンテーションの際、同窓会への加入申込書を配ってサインしてもらうようになった。むろん強制ではないが、ほとんどのグランティエーが加入する。問題は帰国後、いかにして具体的な活動に参加してもらうかだ。現状は、帰国したらそのままバラバラになって、連絡を取り合うこともないようだ。上述の「ウェルカム・ホーム・プロジェクト」をはじめとして、いかに魅力的なイベントを開催し、何がしかのメリットもある会をプロデュースするかにかかっている。

結論などというものはこのアンケートからは出てこないが、前回、前々回のアンケートと本質的に同じ問題点が今回もあぶりだされてきたことは間違いない。現在、定期的に開催している同窓会イベントは、それなりに有益にして必要なものである。だが、それらへの参加者が固定化・高齢化していることも間違いない。忙しい若者・現役・女性を惹きつけるイベントは何か? それをプロデュースするエネルギーを誰が発揮できるのか? 豊かに潜在しているヒューマン・リソースを、2012年の60周年イベントなどをきっかけに掘り起こしてみたい。

全国、全世界に散って素晴らしい仕事をしながら、ほとんど知られていない女性フルブライターの存在がある。それらを知ることが第一歩かもしれない。フェイスブックの活用なども有効だろうし、かく言う「Newsletter」もその一助になりたい。情報をぜひお寄せいただきたい。

(文責・パブリシティ委員会)

同窓会活動

台湾でのフルブライト同窓会 会長会議に出席して

原田 敬美

東京フルブライト・アソシエーション会長
1974 Rice U.

(はじめに) 台湾フルブライト同窓会、台湾外務省の招聘で2010年12月15日から17日までフルブライト同窓会会長会議のために台湾を訪問しました。参加したのはシンガポール、オーストラリア、ドイツ、アイルランド、日本、そして台湾の会長たち(副会長を含む)です(日程は13日からでしたが、私は仕事の都合で15日からの参加)。

(ねらい) 各国のフルブライト同窓会の実情と課題、フルブライト留学の意義について意見を交換。また台湾フルブライト同窓生で行政機関の重職に就いている方々を訪問し、意見交換しました。面会したのはいずれもフルブライトOB・OGで、台湾大学学長・呉博士(台湾同窓会会長)、台湾フルブライト委員会事務局長・陳博士、外務省研究設計委員会責任者・黄博士(40歳と若くして抜擢された人物。今回の会議開催を仕掛けた)、金融庁副長官・李博士(60歳くらいの大変な美女)、さらに国立総合研究所(日本のNIRAに類似)所長・ショウ博士、副所長・劉博士(女性)など。フルブライト同窓生が台湾で有力なポストで台湾をリードしている様子がよく分かりました。

(会議での意見交換と合意内容) 同窓会会長の意見交換で、各国の実情、課題がよく分かりました。今後、定期的にニューズレターなどの交換、様々な意見交換をすることを合意しました。

参加した同窓会会長は、国の地理的分布、会長の性別、年齢など、たまたまよくバランスが取れていました。最高齢者はアイルランドのマクゴールドリック氏で、70代後半の会計士(元農業振興銀行、ミネソタ大留学)、若手はドイツのヴァイテン女史の31歳(ブラウン大留学、ドイツでは会長は選挙で選出)、次に若いのはオーストラリアのシンソン氏(ハーヴァード法律大学院留学)、その次はシンガポールのパキール女史(パークレイとコーネル大留学。シンガポール国立大学教授)、そして私自



身、さらにホスト台湾の呉博士です。

(各国同窓会の特徴、課題) 同窓生数では日本は多い。日本同窓会が留学基金の募金活動をして年間約1億円を集めたことは、他の会長にとって驚きでした。日本の同窓会会員の活躍ぶり(ノーベル賞受賞者、国会議員、弁護士、医師、会社社長、首長など)も驚きのようでした。ただし、近年、留学生数は減少し、中国、韓国の後塵を拝していることも説明しました。従来、日本からの留学生は学界偏重の傾向があったが、今後は実業の世界からも多くの留学生が出るように働きかけを行った、と説明。同窓会活動では、会費の納入率が悪い、イベントなどへの参加者数が少ないなど、共通の課題と感じました。また、フルブライト委員会と外務省、アメリカ大使館との位置づけについても各国で違いがあり、台湾のフルブライト委員会は外務省の一面に置かれているそうです。

- ・オーストラリアは1949年から始まり、60周年を迎えた。同窓会員数はアメリカへ2600人、アメリカから2000人。会費は50ドル(退職者は30ドル)。
- ・ドイツでは会費は40ユーロ、学生25ユーロ。規定で、未納入3回目以降除名。
- ・台湾の会員数は500人、アイルランドは150人~200人(人口400万人)、シンガポール250人、会費50ドル。

(フルブライト留学の意義) アイルランドのように5000キロ離れた場所から、自分の国を様々な視点で見られたこと。専門家などの人的ネットワークの形成、指導的立場の研究者との面会など。またアメリカはオープンな国であると知ったこと。

(台湾での待遇など) 台湾同窓会と外務省が作成した日程表は結構タイトなスケジュールでした

が、空港の公用扱いの送迎、ホテルのVIP待遇など、心配りを感じました。台湾が置かれた難しい状況の中で、多くの人に台湾を知ってもらいたいという思惑もあると思います。

外務省の若い職員は日本に関心があるようで、仕事上、何か問題があると、日本はどのように解決したかを学ぶそうです。坂本竜馬のテレビ番組をよく見ているとのこと。私の愛読書も司馬遼太郎の『竜馬がゆく』であると伝えました。台湾は国際的には難しい立場にありますが、同じ価値観、比較的文化も近いので、交流を大切にしたいと思います。

(お土産) 各国会長に同窓会の「Newsletter」とフルブライト募集のパンフレットを差し上げました。呉台湾会長にはフルブライト賞の装飾品を、外務省幹部の黄氏にフルブライトのネクタイを差し上げました。また、台湾外務省から外務省特製の腕時計をいただきました。

こうした機会に、ニューズレターの交換、フルブライト記念のネクタイ、スカーフなどは適切なお土産、記念品だと思います。常にストックしておくとういと思っています。

シンガポール会長からは同窓会ニューズレター、資料集をいただきました。またシンガポール国立大学の名刺入れをいただきました。

個人的に各会長に手土産を持参しました。お世話になった外務省職員や訪問面会したフルブライト同窓生には手土産を持参せず、気持ち程度のギフトを持参すればよかったと反省しております。

ゆるい組織もまたよし ジャーナリスト会

小泉 成史

元・読売新聞 1984 M.I.T.

何が嫌いと言って、パーティが始まる前のダラダラした、つまらない挨拶ほど嫌いなものはない。手に持ったビールがぬるくなってしまわないか!

普段から、こう思っているせいかちな筆者が突然、司会を仰せつかったので、会は堅苦しい挨拶一切抜きの「乾杯!」から始まりました。

7月8日に東京千代田区の日本記者クラブで3年ぶり再開かれ、約20人が出席したジャーナリスト部会(同窓会)の冒頭です。

この会については、幹事の一人の松尾秀助さん(1977 American U.)が昨年の「Newsletter」の「フルブライト同窓会 各地区の現状と活性化への方策を探る」という文章の中で、その性格をこう書いて

います。

「ジャーナリスト・フルブライトは120名ほどいるが、「ジャーナリスト同窓会」は小グループから自然発生的に生まれたもので、会長や事務局機能もなく、「そろそろ一杯やろうか」と誰言うともなく数年に一度の頻度で集まっている。前回は2008年に15名の会員と、アメリカン・グランティ、さらにJUSECからも参加してもらって賑やかに懇談した。他の同窓会とは異なるが、こうしたゆるい組織もあっていいかもしれない」

お断りしておきますが、気の合った仲間内だけの会ではなく、あくまで「同窓会」なのでJUSECが把握しているジャーナリスト会員の皆様全員にeメールの他、ハガキでも連絡しています。もし「私のところには連絡がなかった」と思われる方はTFA事務局までご連絡ください。次は必ず連絡が行くように引き継ぎます。

さて、単なる不定期な「飲み会」のような「ゆるい組織」ですが、酔っぱらっておしゃべりしているだけではありません。

特に今回は来年、予定されている「60周年記念行事」にジャーナリストとしてどのような協力ができるかという重要なテーマがありました。記念事業のシンポジウムの実行委員長である早川与志子さん(1985 Northeastern U.)の報告によるとシンポジウムは以下のような要領で行われる予定です。

開催日: 2012年5月26日、内容: 「基調講演」以下3つのパネルディスカッション。「米国大使と日本の若者」、「女性フルブライト」、「今後の日米関係」。それぞれの参加者の人選や詳しい内容などは実行委員会が目下、作業が進められています。

ジャーナリストとして協力できるのは、それぞれのメディアを通じての広報です。しかし、シンポジウムを真正面から取り上げてくれるメディアは、このご時世少ないでしょう。そこで早川さんは「シンポが取り上げてもらえるように若い現役の会員からもアイデアを出して欲しい」と訴えました。

盛り上がった懇談の最後に今回の参加者で一番のベテランの佐々木久雄さん(1962 NYU)がキューバ危機当時の米国の思い出を話され、一同、歴史を語り継ぐ意味を再認識しました。

長谷川明子さん(1967 Washington State U.)、小西博美さん(2006 Georgetown U.)は遠路はるばる関西から駆けつけて頂きました。ありがとうございました。千野境子さんには会場確保にご尽力いただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

さて次回は何時、開くことになるやら?

2011年度日米教育交流振興財団奨学生冠名リスト

採用者数	Fulbright Fellows (Recent B.A.)	Graduate Research Fellows (Graduate Students)	Graduate Students - Japanese	…FF	…GRF	…GSJ	6名	4名	1名
奨学生名	冠名(敬称略)	カテゴリー	受入大学名	出身大学(最終)名					
< Americans >									
BENKHART Alexander B.	日米教育交流振興財団	FF	大分大学 教育福祉科学部	Hamilton Coll. (Sociology)					
BRAUN Steven G.	三上基金	FF	京都大学 理学研究科	St. Olaf Coll. (Chemistry)					
CHU Karen L.	日米教育交流振興財団	FF	東京工業大学 生命理工学研究科	UC Davis (Biology)					
DAMIAN Michelle M.	日米教育交流振興財団	GRF	東京大学 史料編さん所	U. of Southern California (Japanese History)					
DAVIS Nellie R.	志野基金	FF	大阪芸術大学 芸術学部	Mount Holyoke Coll. (Art History)					
DE ST. MAURICE Gregory A.	三菱	GRF	京都大学 農学研究科 国立民族学博物館	U. of Pittsburgh (Anthropology)					
HARRIS Tobias S.	日米教育交流振興財団	GRF	東京大学 社会科学研究所	M.I.T. (Science)					
HILL Ashley V.	日米教育交流振興財団	FF	関西大学 国際関係学	Colgate U. (International Relations)					
MIRSALIS Dana C.	三上基金	FF	南山大学 人文学部	Brown U. (Religion & Theology)					
QUINN Aragorn	財)吉田育英会 (YKK)	GRF	筑波大学 人文社会科学研究科	Stanford U. (Japanese Literature)					
< Japanese >									
山中 美潮	財)吉田育英会 (YKK)	GSJ	U. of North Carolina (American History)	京都大学 大学院博士課程 (米国史)					

日米教育交流振興財団の状況

○下記ホームページ、日米教育交流振興財団『ディスクロージャー資料』にて、次の資料を公開しております。
http://www.fulbright.or.jp

- 1) 定款
- 2) 役員名簿
- 3) 事業報告書
- 4) 貸借対照表
- 5) 正味財産増減計算書
- 6) 財務諸表注記
- 7) 財産目録
- 8) 収支計算書
- 9) 収支計算書注記
- 10) 独立監査人の監査報告書
- 11) 監査報告書
- 12) 事業計画書

財団法人 日米教育交流振興財団・地区別役員等 (敬称略・50音順)

地区	評議員 (10)	理事 (19)	監事 (2)	顧問 (3)	審査委員 (11)
北海道	小柳 知彦	山岸 俊男			曾野 和明
東北		佐々木 公明			佐々木 公明
東京	太田 隆次 長坂 健二郎 早川 与志子 福田 学 和田 昭穂	(理事長) 潮田 資勝 (副理事長) 文野 千年男 飯野 正子 石原 直紀 賀来 景英 金田 新 原田 敬美 藤田 幸雄	舟橋 定之	(最高顧問) 大河原 良雄 渡邊 宏	(審査委員長) 五十嵐 武士 印南 一路
中部	星野 靖雄	塚田 守			藤本 博
北陸		藤原 哲也			橋爪 祐美
京滋		細谷 正宏		(最高顧問) 岡本 道雄	千葉 哲郎
大阪	牧野 信夫	清澤 悟 大津留 智恵子			山藤 泰
中国		大津 章			木村 榮一
四国	太田 英章	戸澤 健次			
九州	落合 太郎	稲垣 良典	吉村 徳重		高橋 勤
沖縄		比嘉 幹郎			瀬名波 榮喜

吉田育英会 (YKK)
財団冠奨学生表敬訪問

YKK 研究開発センターを訪れて

ライアン シーブルック
U. of Arizona

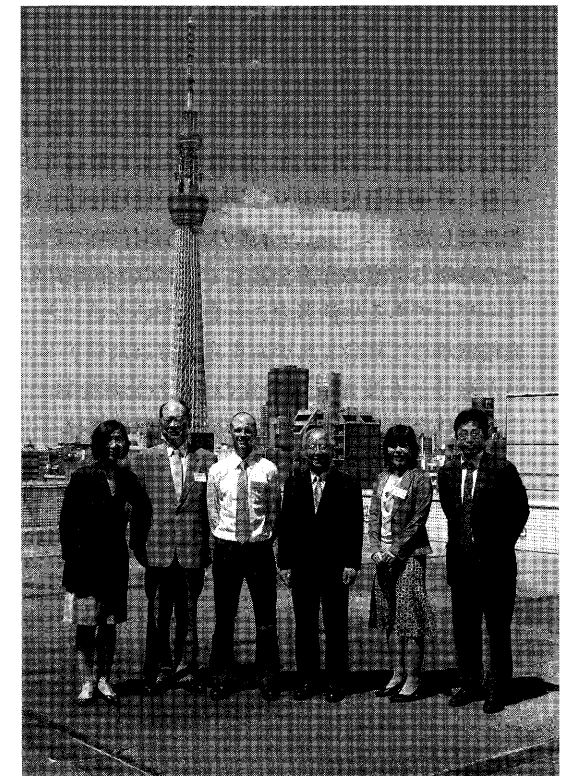
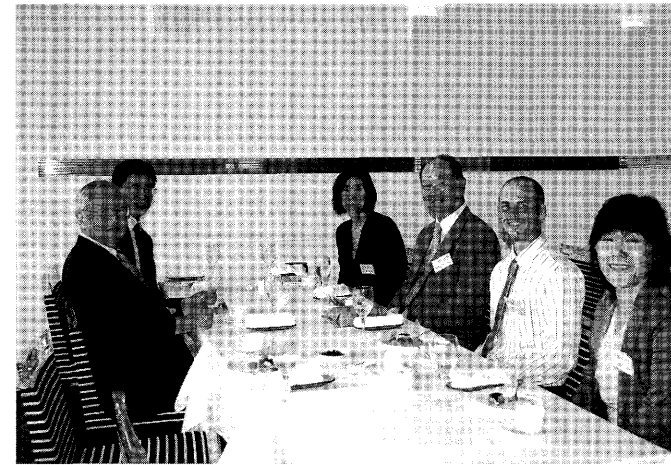
私の名前はライアン シーブルックです。私はアリゾナ大学大学院社会学の博士課程の学生です。YKKのおかげで私はフルブライト奨学生であり、大学院研究生として静岡大学で日本の教育制度について研究しています。以前は、修善寺工業高等学校でJETプログラムのALTとして働きました。その時、日本とアメリカの教育制度の比較について興味を持ちました。特に教員の職業生活の違いについてです。YKKは私に墨田区にあるYKKの研究開発センター見学に誘ってくれました。

3月14日にお会いする予定でしたが、3月11日の地震があり、6月28日に延期になりました。墨田区にあるYKKの研究開発センターに行って、常務理事鈴木茂男さん、事務局長佐久間功さん、主事開康寛さん、日米教育交流振興財団 副理事長文野千年男さん、事務局長松島たかねさん、フルブライト・ジャパン岩田瑞穂さんにお会いしました。

YKKの研究開発センターを案内してくれ、会社で何を作っているか説明してくれました。私はすでにYKKはチャックで有名なことは知っていました。でも、他にもファスニング事業、建材事業、工機も作っていたことに驚きました。特に、建材事業は建物を作るために使われているのでとても興味深かったです。

建物の中にある、墨田区が一望できる個室のとても素敵なレストランで、食事とてもおいしかったです。お昼を食べながら、鈴木さん、佐久間さんと旅行の話や研究についてお話しでき、とても楽しい時間を過ごせました。お昼を食べた後は、屋上へ案内していただき、東京スカイツリーが見える素敵な景色も楽しませていただきました。それだけではなく、隅田川花火大会の日にもご招待いただき、屋上でとてもきれいな花火も見ることができ、皆様にまたお会いできたこともとても嬉しかったです。

最後になりましたが、このような機会を下さった吉田工業株式会社 (YKK) 吉田社長に深く感謝しております。



国会と最高裁判所を見学して

【国会見学】

6月13日(月)、朝方降った雨がやみ、今日の見学には傘の出番はまずなさそうだと安心しました。今回の参加者は、フルブライト・グランティ7名、国際交流プログラム留学生7名、引率者が舟橋定之氏(1968年 U. of Michigan)、山田真之氏(1976年 Georgetown U.)、島田道子氏(1957年 U. of Minnesota)が参加され、総勢18名でした。

TFA事務所に10時に集合し、10時半に国会に到着すると、江端貴子衆議院議員事務所の棚橋様が出迎えて下さり、2階の衆議院議場で国会についての説明を受けました。このあと、天皇陛下のための御休所、中央玄関、中央広間にある伊藤博文、板垣退助、大隈重信の銅像などを見学しました。国会見学が終わると、国会議事堂の前で集合写真を撮り、全国の「県の樹」が並ぶ道を通り一同衆議院第一議員会館に移り、江端貴子議員からテーマ「留学と現在の私〜ビジネスから政治の世界へ」について英語での説明を受けました。江端氏はフルブライト奨学生としてMLTに留学され、経営学修士を取得し、マッキンゼーを経てアムジェン(株)では取締役昇格されましたが、お母様の介護のため退任されました。その時のお母様の介護を通じて「日本の介護制度が、ユーザーである生活者のことを見ていない」という違和感から「社会システムを変えてみたい」との思いが募り、たまたま民主党のHPの公募を目にし、門を叩いたそうです。お話の後の質疑応答は「なぜ女性は政治家になりにくいのか」、「消費税の税率を上げる時期はいつか」など、時間ぎりぎりまで活発な質疑が飛び交いました。

国会議事堂の食堂で、めいめいがお好みのチョイスで昼食を楽しみました。さすがアメリカン・フル



国会議事堂にて

ブライター。日本通なのかメニューをさらっと見るや否や「親子丼」や「寿司」など間違えられませんでした。

【最高裁見学】

最高裁見学はグランティとその家族の他、同窓会役員など、合計10名でした。

財団監事 舟橋定之氏(1968 U. of Michigan)の案内で寺田逸郎最高裁判事の執務室を訪問し、記念撮影をしました。場所を移して、ビデオを見ながら「司法権の独立と三権分立」が憲法によって定められていること、裁判所の組織——最高裁の下に高等裁判所があり、その下に家庭裁判所と地方裁判所があり、さらにその下に簡易裁判所があることなどの説明を受けました。その後、最高裁判所事務局秘書課渉外第一係長 園田良太郎氏が大ホールや図書館などの説明を英語でして下さいました。最高裁判所の中心的な場所、大法廷では、アメリカン・グランティのみなさんが奥に並んだ15の裁判官席に座り、ポーズをとりながら写真を撮ったりして一瞬和やかな雰囲気になりました。その後、寺田逸郎最高裁判事がいらっやって、グランティからは活発な質問が行われたが、質問内容からグランティの関心が司法権の独立と最高裁判所長官、同判事以下、下級裁判所の裁判官の任命の行政権、国会等からの独立に関するものが中核的でありました。中には、どういう経緯をふんで、最高裁判所判事になれるのかという大胆かつ細かな質問もされました。

午後4時に最高裁ツアーが終わり、解散しました。みなさんにとって、日本の制度を垣間見た有意義な一日であったと思います。



最高裁判所・寺田逸郎判事と

秋の鎌倉を歩く会

松尾 秀助

1977 American U.

新嘗祭か勤労感謝の日か、はたまた Thanks Giving Dayか、11月23日はよく晴れた。鎌倉駅西口に集合したのはアメリカン・グランティ(とその家族)10人とTFA関係者16人。無風快晴の祝日とあって、いつもに増して大混雑の江ノ電に乗り、長谷駅下車。アメリカン・グランティたちもみんな乗車カードを持っていて、すっかり日本の生活に馴染んでおられる。外池滋生さんが今年の「Newsletter」に書いたレポートが利いたか、今年は例年の北鎌倉→鎌倉コースではなく、長谷観音と大佛をメインとしたルートになっている。

リーダーがリュックにたてた緑の旗の後ろについて長谷寺へ。300円払って入場。「誰か英語で解説してくれる人、この中にいないのかな」「堀江(昭)さんがくれたマイケル・クーバーの英文解説を読めばいいんじゃない」「あれ、長いんだもん」とおしゃべりしながら階段を登ると、正面に十一面観音立像を納めた本堂。9メートル余、木造観音像としては日本一。天平時代に一本の楠の霊木から二体が彫り出されたうちの一体(もう一体は大和の長谷寺に)という。坂東三十三観音札所の第四番。「永き日のわれらがための観世音」と虚子も詠んでいる。善男善女は多いとみえて、写経場はいっぱいだ。展望台からは由比ヶ浜越しに逗子、葉山の山並みを見渡せる。

つづいて大佛さんがおわします高德院へ。世界歴史遺産への登録を目指す鎌倉観光のメイン・ルートであり、行く人、帰る人が行列をなす。ハトバスの黄色い旗とわれらが緑の旗が交差する。途中の茶店にある「オバマツ茶ソフト」の看板はご存知の通り。200円で境内へ。113メートルの国宝・阿弥陀如来坐像は造られた13世紀には大仏殿に納まっていた



が、大風、津波でたびたび壊され、いまの露坐となった。今は由比ヶ浜から遠いと思われるこの地も、当時は海に近く、津波に襲われたのだ。「Daibutsu is made in copper」「No, in bronze.」「聞いてみよう」「銅です」「ドウダ!」——ほんとは純銅ではなく、ブロンズに近い合金らしいが一般には銅製とされている。

様々な文人たちがここで短歌・俳句をものしているが、与謝野晶子の「鎌倉や 御仏なれど釈迦牟尼は 美男におはす夏木立かな」が有名。「Handsome?」と指差すと、女性たちは、「Oh, yeah!」——よかったね、国際的に認めてもらって。

大佛前で記念写真を撮り、ここからは自由行動。歩くもよし、電車もよし。4時までには鎌倉駅東口に集合するべし。歩き組は途中の鎌倉文学館に寄った。加賀百万石の前田侯爵別邸を改造した建物が、鎌倉の古くてモダンなイメージを象徴している。展示内容も、古くは万葉から近現代に至る文学と鎌倉のかわりをうまく構成している。

一度鎌倉駅に集合した面々は、5時までそれぞれ鶴岡八幡宮へ足を延ばしたり、小町通りをショッピングしたり。5時に駅近くの居酒屋で恒例の打ち上げ宴会が始まる。外池滋生リーダーの司会で、堀江さんの乾杯挨拶。2時間飲み放題だが、ノンアルコール派も多く、サラダ、ピザ、鍋と食いは旺盛だ。全員の英語による自己紹介で盛り上がる。子供さん二人と参加したブルース・アローソンさんは早稲田大学でリサーチャー(法律)として滞在中。コーボレート・ガヴァナンスが専門で、これが二回目のフルブライト体験。最初のときは大和証券事件の重大判決が出た。今回はオリンパス事件が起こり、そのリサーチで忙しいという。「必ず何か事件が起こるんですよ」——次の来日はいつ? どんな事件が?

あんなに晴れていた空も、夕方から曇りがちになり、小雨が降り始めた。かくして今年も歴史散策という勤労を感謝し、宴会では収穫に感謝し、無事に友好イベントが終わった。

東日本大震災の現場で—二人のジャーナリストが見たもの

寺島 英弥(河北新報社編集委員) 藍原 寛子(フリージャーナリスト・元福島民友記者)



寺島英弥(2002 デューク大相馬市生まれ、早稲田大卒。河北新報社入社。「心の伏流水」(北の折り)(1993)「オリザの環」(1997)で日本新聞協会賞。

(寺島)

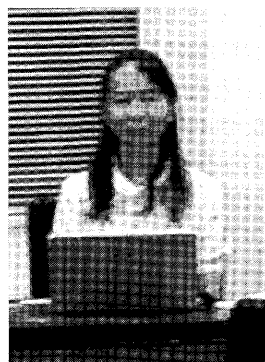
私は1979年に河北新報に入社し、論説委員、編集委員を務め、33年間書く仕事をしてきました。3月11日は仙台市青葉区の本社5階にいたのですが、ただちに中庭に出ました。雪が降って寒かった。本社ビルの外壁も一部崩れ、中の壁にもヒビが入りました。何があったのかを、まず調べようということで、みんなの安否確認をし、電話も通じにくかったのですが、社に上がって来いと指令。緊急取材本部を立ち上げて、各担当、総局、支局に連絡しました。テレビを見て津波が来たことを知りました。その後は一部の支局とは連絡がとれなくなりました。

とにかく見たもの、聞いたことをメモでいいから電話で知らせろ、と。全体像は想像もつかない。群盲象を撫ぜる状態でした。いまの新聞は昔と違ってITで作っていますから、パソコンからデータを送り、整理部で紙面に組みます。ただ、サーバー・コンピュータが横倒しになってしまって、すぐ使えるかどうかわからない。で、災害協定を結んでいた新潟日報に作ってもらうことにして、原稿、写真のデータを送信すると同時に整理部から2名新潟に派遣。河北新報の印刷工場は無事でしたから、夜7時前に2ページの号外を1万部発行しました。翌朝も8ページを同じ方法で発行し、組版基本サーバーが正常に稼働することが分かったので、12日の夕刊から本社での紙面制作が完全復旧しました。

石巻、気仙沼の両総局も冠水し、ライフラインを失った住民が避難し、気仙沼の総局長は、「避難してきた人たちに食料を」と近くのコンビニに走った

直後に津波に襲われ、「死を覚悟した」と体験記に書きました。女川町に取材に行っていた記者は、町役場の屋上に逃げて助かりました。車がビルの屋上に引っかかっていたそうです。翌日借りた自転車で石巻に出たけれど、ここも壊滅。車に乗せてもらって仙台の本社に帰り着きました。カップラーメンを震えながら食べていた姿が忘れられません。彼の妻子は気仙沼にいたのですが、津波と火災で生死も分からない。彼が書いた署名入りの記事を見た奥さんから連絡があったのは15日のことでした。記者たちも被災者だったんです。

私自身は15日になってはじめて現場に出られました。遠野のホテルを前線基地にして、各地に取材に行きました。陸前高田はまるで写真で見た原爆後の広島みたいでした。「トモダチ作戦」で空母「ロナルド・レーガン」からヘリで物資を大量に運んでくれました。イラク、アフガンで戦っているのと同じ若い兵士たちが被災地を助けてくれたんです。この間、国際戦略研究所のアメリカ人で、以前石巻に居たことがあるという日本語ペラペラの人が、クリントン国務長官の意を体して、どうしたら日本の被災地を復興させられるか、調査に来ていました。ハリケーンで被災したルイジアナ大学の防災研究所所長も来ていましたね。



藍原寛子(2005 マイアミ大福島市生まれ、福島民友社に入社。「波涛の向こうに」でLA福島県人会100周年記念特別賞受賞。日本医学ジャーナリスト協会会員

(藍原)

私は2005年にジャーナリズム・プログラムで留学し、臓器移植を研究しました。福島民友にいたのですが、3月末で退職することにして東京にいました。地震があって、私にできることは何だろうと考

え、ジャーナリストとして現場を早く見ることで、4月上旬から以前勤務していたいわき市に入りました。原発にも市民団体にも知っている人がいましたから。福島県は原発の報道ばかりで、海岸沿いの瓦礫の町の姿はあまり報道されていませんでした。

医療に関わるジャーナリズムが私の主な仕事でしたから、避難所などでの医療・福祉を中心に取材してきました。避難所などの集団避難には阪神淡路大震災のときもそうでしたが、大きな問題があります。まずプライバシーがない。それに原発事故があったので、県外からの医療関係者が入るのをためらった。

私がいわき市を車で走っていたら、同じフリージャーナリストの神保さんという人にたまたま出会いました。原発から20キロ、30キロの範囲で動いているジャーナリストはわれわれ二人だけ。新聞社にはマニュアルがあって、原発から何十キロ以内に近づいてはいけないことになっています。われわれはフリーで自己責任ですから、安全な範囲で活動しようと、意気投合しました。こういうときこそジャーナリストとして発信する必要性を強く感じました。

いわき市の退避圏内でも、逃げずに生活している人はいました。寝たきり老人などは動かすと危ない。富岡町(原発から9~10キロ)にある認知症のグループホームにも退避命令が出ましたが、家族も受け入れることができない。40数人がジブシー集団のように県内を転々と移されました。役場自体が転々としているし、住民も北海道や沖縄へ分散している。ピアスポラというのは種が飛び散ることから、ユダヤ人のように帰る場所がない難民を言いますが、住民、自治体全体がピアスポラ化してしまった。これからどういう影響が出るか、分かりません。

郡山市には一時は2000人が集団避難していて、ちょっとした町村なみの人数でした。高血圧の方には食事の塩分が多すぎるなどの問題がありました。飯館は原発から50~60キロ離れていますが、放射能がどう拡散するかを予測するスピーディというシステムの数値が公表されないまま、風で流れてきた放射能に被曝して、やっと5月、6月になって全村避難しました。

石巻も取材しましたが、車が流されて、みんな足を失っている。災害支援ナースというボランティア活動グループが避難民を支援して物資の配給などをしていましたが、復興がなかなか進まない。福祉避難所はスペースが必要なために郊外へ郊外へと追いやられていきました。

土壌汚染も深刻で、小学生たちはみなマスクをして登校していました。表土を調べて、県民が自分た

ちの手で除去し、除染活動をしなければならないんですね。福島県では食品汚染もあって、市民の手で計測する活動が始まっています。

6月26日には市民の反原発デモがありました。メディアはこれまで反原発デモについてはイデオロギー的な捉え方をしていましたが、いまは止むに止まれぬ思いを表現する場としてのデモです。いままでまったくデモンストラシオンがなかった女性たちが、自分でメッセージを書いて参加していました。

(寺島)

私はずっと「余震の中で新聞を作る」というブログを書いているので、よかったら見てください(<http://flat.kahoku.co.jp/u/blog-seibun/>)。私は相馬市出身で、実家は原発から50キロぐらいのところですが、周囲では家族が死んだり、被災したり、記者自身が当事者になってしまいました。故郷を離れた人もおり、「新相馬節」という民謡がありますが、初めてこれが望郷の唄だったことに気づきました。

福島県にも風評に立ち向かう人たちもいます。水没した田んぼを地下水を使って、試験田を作りたいというんです。どのくらい作物から放射能が出るか、確かめたいと。それでダメならあきらめるけど、と言っています。潮をかぶった土地に、何なら育つか。篤農家の人で農業賞のクリスタルの盾が泥の中から出てきた。亡くなった奥さんの墓に入れてやろうと思ったけど、「まだ俺のやる仕事は終わってない」と考え直して、実験をしているそうです。牛乳も売れないが、「気にしないんだったら飲んでくれよ」と持ってきてくれる。トマト農家も自主避難なんかできないと言って、収穫したトマトを自衛隊などに配ってます。

「もったいない、までい(ゆっくり・ていねいに)精神を子供らに残さねばなんねい」と言っています。(藍原)

私はフロリダ州にいたとき、ハリケーン・カトリナを体験しました。それが今回、まさか自分のふるさとはこんなことになるとは思いませんでした。今まではジャーナリスト的な関心でしか物事を見ていませんでしたが、今は違います。「これでいいんだろうか? 私たち日本という国はどういう方向に行こうとしているのか」という当事者としての義務感と怒りから取材活動をしています。

皆さんにお願いしたいのは、ぜひ現地に行ってみてきてもらいたい。避難所でも市役所でも、地元の人と話をしてもらいたい、ということです。いま私は東京と福島を行ったり来たり、半々の生活をしています。

日本の技術系博物館は 欧米に比べてなぜ貧弱なのか？

小泉 成史

フリージャーナリスト
1984 MLT.

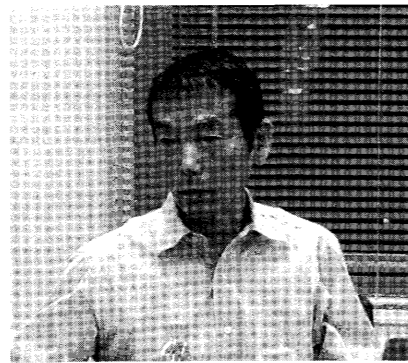
ちょっと刺激的なタイトルですが、今日はドイツ、フランスなどを中心に、欧米の技術系博物館がどんなものなのかをスライド・ショーの形で見ていただくと思います。そうすると、いかに日本の科学系・技術系博物館が貧弱であるかが浮き彫りになるはずですよ。

私は1949年、東京生まれで、早稲田大学理工学部で建築を学び、工学修士を取りました。建築といっても建築史という文科系の歴史に興味を持って専攻しました。74年に読売新聞社に入り、主に科学技術を担当してきました。

なぜ博物館に興味を持ったかという、アメリカでは先日亡くなったスティーブ・ジョブズのような若者が革新的な技術を次々と生み出していく。古くはエジソンやライト兄弟もいる。それがなぜなのか？ どんな環境で生まれるのか、に興味を持ちました。で、84年、フルブライト奨学金でM.I.T.に行き、アメリカ技術史を勉強しました。さらにスミソニアン米歴史博物館で客員研究員として自由に研究ができました。この博物館は名前は人文系のようなのですが、元は歴史技術博物館といい、技術中心の展示です。

87年から90年までの特派員時代に各地の博物館を見学し、98年には読売が「大英科学博物館展」をやるについて、ロンドン科学博物館を一週間かけて取材する機会がありました。ここは展示されているもの以外に、ものすごいストックを持っていて、別館に古いX線撮影機やコンピュータなどがズラリと収蔵されている。これはかなり日本の博物館とは違うぞ、という実感を持ちました。

ここでいう「科学系博物館」「技術系博物館」というのは私の造語で、「系」と入れたのは、たとえば「科学博物館」と言うと、日本では国立以外にも各県などにもあります。普通、日本人は科学博物館と言うと恐竜や鯨の骨がある自然史博物館のことをイメージすると思います。技術博物館と名乗っているところはあまりありません。最近ではさらに「サイエンス・センター」ができて、子供たちが参加・体験し



東京生まれ。早稲田大学理工学部建築科修士課程終了。読売新聞科学部。現在、フリーの科学ジャーナリスト。金沢工大客員教授。著書に「おススメ博物館」(文春新書)など。

てサイエンスを学び、考え方を身につける場になっています。ほかに毛利さんがいる科学未来館や竹橋にある科学技術館もサイエンス・センターに近いものです。

上野の国立科学博物館は自然史博物館もサイエンス・センターも兼ねて同居させている。これは欧米から見ると異様なものに見えます。しかも狭くて、小さくまとまっています。

で、私の独断で選んだ「世界四大技術系博物館」と言うべきスミソニアン博物館、ドイツ博物館、ロンドン科学博物館、パリ技術工芸博物館を見てみましょう。そうすると、おのずから日本の技術系博物館がいかに貧弱であるか、お分かりになると思います。

スミソニアンは合計19館(私がいたときは13館でしたが)あって、一番有名なのが宇宙航空博物館。さらに自然史博物館、米歴史博物館、ナショナル・ギャラリー・オブ・アートなどです。宇宙航空博物館にはさらに別館ができて大きくなりました。引退したスペースシャトルもここに入るでしょう。イギリス、フランス共同開発の超音速旅客機コンコルドのように他国のものでも人類史に残るものはすべて集めるというスタンスです。

次にドイツ博物館はミュンヘンにあって、1925年に開館しました。巨大な建物で、4、5年前にも行って一週間ミュンヘンに滞在して通いましたが、全部は見られませんでした。

新しい一角にコンピュータの部屋ができていて、その規模の大きさ、集めているものの凄さにびっくりしました。コンピュータ以前のアナログ計算機から始まって、野戦砲撃用の計算セットが箱に入って美術品のようにになっているのが印象的でした。スペインのエンジニアが開発したアナログ計算機は歯車の組み合わせが非常にきれいでした。スーパーコンピュータで一世風靡した米国のクレイも保存されて

います。日本にいっぱいあったクレイはどこに行ってしまったのでしょうか。見たことがないです。技術史上、重要なものは他国のものでもきちんと保存しておくドイツの博物館はたいしたものだと思います。

コンラート・ツーゼというドイツの天才がナチス時代に独力で開発したコンピュータ「Z3」も保存してありました。通常、コンピュータはペンシルベニア大学で開発されたエニアックから発展していったとされていますが、ツーゼはそんなことはまったく知らずに作り上げたんですね。

こうした展示物には開発ストーリーが裏に隠れていて、われわれライターにとってはネタの宝庫なんです。単に物を見るのではなく、それを作った科学者の思いや苦勞を探す楽しみも博物館のメリットでしょう。また、現役の科学者が刺激を受けられる場所でもあります。

つぎにパリ技術工芸博物館です。パリのアール・エ・メチエ駅下車。1794年創立という古いもので、埃をかぶって誰も見向きもしない博物館だったんですが、2000年に大改修しました。ウンベルト・エーコの著書にもなった地球の自転が分かる「フーコーの振り子」の本物があります。13世紀に建てられた、礼拝堂の中に鉄骨を組んで、フランスのテクノロジーを代表するようなもの、シトロエンとかプジョー、ミシュラン・タイヤなどが展示されています。自国の輝かしき伝統技術を拝め、という感じです。この部分にはシンボリックなものだけを配して、本館に巨大な蓄積の展示を見せています。その展示の仕方、フォルム、配分がまた美しい。

発電機いろいろ、手旗信号の機械版である腕木通信機、パスカルが考案した計算機の実物。ラヴォアジエの化学実験室がそのまま保存されている。

さて、以上の欧米の科学系博物館を見たあと、日



ドイツ博物館にて

本の現状はどうなっているのかを見てみましょう。先ほども言ったように、上野の科学博物館が頂点にあるわけで、日本で一番の存在です。しかし、自然史系と技術系とサイエンス・センターが同居しているという先進国では極めて稀な不思議な博物館になっています。その結果、展示はどれも貧弱で中途半端になっている。日本では技術系博物館はまったく認知されない。せつかく「技術立国」と言っているのに、です。私が書いた『おススメ博物館』(文春新書)にもありますが、たとえば、トヨタの産業技術記念館はトヨタ・グループが作ったもので、自動車と織機が中心ですが、素晴らしいです。ただし、学芸員がいない。説明員はOBの人たちです。ちゃんとやれば技術史のセンターになれるのに、調査・研究する体勢になっていない。トヨタにはトヨタ博物館もあって、これは学芸員もいますが、自動車だけの一ジャンル博物館です。

吉田光邦さん(元京大人文学研究所長)が大阪に産業技術史博物館を作ろうと提唱して、万博公園に集積してあった江戸時代以降の二万点に及ぶ産業資料が、橋下知事が建設を却下したためバラバラになったり、大学や博物館に引き取られたそうですが、これが技術立国を標榜している日本の現状です。自然史系博物館はまだ恵まれている方です。

吉田光邦さんによれば、これは、欧米と日本の歴史認識の違いから来るのだそうです。日本は歴史といえば戦記もののようにストーリー中心なんですね。ヨーロッパではモノにこだわった歴史観がある。だから徹底的にモノの保存にこだわるんです。これが技術系博物館ができるかできないかの違いになるというわけです。

欧米の博物館の多くは個人や企業の寄付で成り立っています。そのことが明記してあるし、税金控除の制度もあります。日本は国立のものは文部科学省の管轄で、そのトップはほとんど天下りです。新聞社は展覧会などをやるから博物館とつるんでいて、批判できない。

ただ、救いがないわけではない。さきほど紹介したような企業や大学が作っているミニ・ミュージアムで、優れたものはいくつもあります。また、学会は歴史的に貴重な機器などを「技術遺産」として認定し、各所で保存するように努めています。それらをネットワークすれば、日本全体としてある程度の産業技術資料は見られます。将来的には産業技術博物館の設立が夢ですが、そういうネットワーク作りが当面の課題ではないでしょうか。

東日本大震災復興支援に 同窓会会員一同から義捐金をお届け

原田 敬美 (TFA 会長)

2011年7月13日(水)、東北同窓会を訪問、全国から寄せられた心温まる義捐金1,078,815円を佐々木公明会長にお渡ししました。

仙台駅前ホテル内のレストランの一室で、東北同窓会役員(佐々木公明会長、藤井建人事務局長、仁科雄一郎前会長、佐々木肇氏、渡邊剛氏の5名)がお迎え下さり、私は、被災に対してのお見舞いの言葉を申し上げ、全国のフルブライト同窓生からの温かいお気持ちを持参しましたと、義捐金(目録)を佐々木公明氏に手渡ししました。佐々木公明会長はじめ役員の皆様から募金を寄せていただいた同窓生に対しお礼のお言葉がありました。

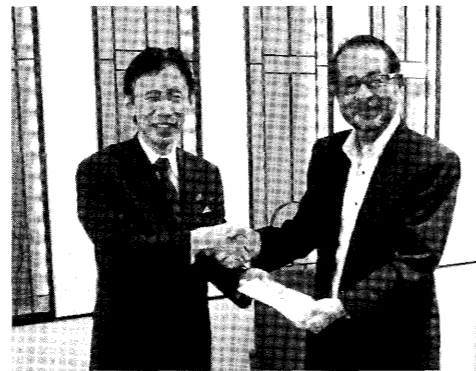
そもそも3月25日東京で開催されたフルブライト財団理事会の席上、沖縄同窓会会長の比嘉幹郎氏が「東日本大震災で被災された東北同窓会に義捐金を送りましょう」と発言があり、その提案に対し評議員長坂健二郎氏(元東京フルブライト・アソシエーション会長)が「募金活動は財団活動の趣旨に合わないので、東京同窓会が取りまとめをしてはいかかか。ついては原田さん取りまとめ役をお願いします」と発言があり、僭越ですが全国同窓会を代表し、東京同窓会が担当させていただくこととなりました。そうした経緯で募金活動が始まりました。

募金活動の方法について、東京同窓会総会が6月23日に開催予定であることから、4月、5月、6月と3回に亘り各地区同窓会に呼びかけ、また、総会当日にも呼びかけ、7月に東北同窓会を訪ねる予定を立てました。

沖縄県、福岡県など九州地方、大阪府、京都府、兵庫県などの関西地方、福井県などの北陸地方、地元東京同窓会会員から募金が届けられました。

東京同窓会総会当日は、同窓会事務局スタッフお手製の募金箱を受付に設置、多くの出席者が募金箱に募金をしていただきました。

振り返りますと、3月11日2時46分、私は東京六本木の事務所を出た所で地震発生、歩道で立っているのが大変なほど揺れました。専門家の直感として震度5以上と感じました。地鳴りを耳にしました。ビルの看板が落下するのを恐れ、車道側に寄りました。鞆に入れていたラジオのスイッチを入れると宮城沖で地震との緊急ニュース。東京で大変な揺れから仙台は大変なことになっていると想像しまし



東北同窓会に義捐金をお届けする原田会長

た。同時に3月14日(月)東京同窓会が予定していたアメリカからのフルブライトの歓迎会をどうするか、頭をよぎりました。その後、ルース駐日米国大使の避難命令等素早い対応を報道で知り、さすがと感心させられました。

4カ月後の7月13日、新幹線で仙台駅に近づくにつれスピードが次第にゆっくりとなり、車窓から見える範囲では大震災の痕跡は見当りませんでした。震災直後、仙台駅の天井が落下したと報道写真がありましたが、仙台駅は見事に復旧されていました。

私が建築の専門家であるということで東北同窓会事務局長の藤井建人氏が事前に調整して下さい、仙台市の著名な施設「仙台メディアパーク」(市立図書館)の被災状況をご案内いただきました。1階から5階までは既に修復され、多くの市民が利用しているが、6階は天井材料が一部落下し修理中でした。

東北同窓会役員の皆様と懇談の際、貴重な被災体験談を聞かせていただきました。

佐々木肇氏は「1964年の新潟地震の際、新潟に住んでいて被災、今回は仙台で被災し、人生で2度も大地震を体験しました」。藤井建人氏は「地震発生後、電気、水など必要な生活インフラが破壊され、最初の3日間は大変でした。ガソリンがないので車で移動ができず、ガソリンスタンドは長蛇の列でなかなか給油ができず、大変でした。体験上大震災後最低3日間は自活できるよう準備が必要です」と語っていました。こうした体験談は私たちにとり、大震災に備えるための貴重な助言です。

一日も早い東北地方の復興をお祈りします。

募金をお寄せいただいたフルブライト同窓生の皆様に対しまして、取りまとめ役の立場から御礼を申し上げます。

グローバル化する同窓会連携にどう対応するか

—東アジア太平洋地域・アソシエーション強化会議に参加して—

モンゴルからの報告

今井 章子 2004 Harvard U.

さる10月7日から11日まで、米国国務省の人物交流プログラムの同窓会組織のうち東アジア・太平洋の各国代表を一同に集めた、同窓会強化会議(East Asia Pacific Regional Alumni Association Enrichment Conference)が、モンゴル米国務省アルムナイアソシエーション(MASA)と米国務省の共催によりウランバートルで行われた。私は、ハワイの東西センター同窓会東京チャプター代表、SUSIプログラム¹アルムナイとともに会議に参加し、同窓会組織の成功事例を紹介するセッションで「ファンドレイズ戦略」について発表を行った。

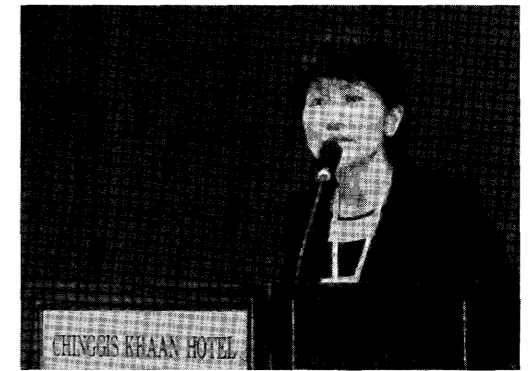
派遣が決まる前の段階で、会議で提供可能なトピックを国務省に知らせることになっており、私は、「震災時に日本のフルブライトがどのような活躍を行ったか」、「Newsletterで過去に実施したアンケートから見えてきた同窓会活動への示唆」などを紹介したいと伝えていた。だが主催者からの連絡は意外にも「日本のフルブライト同窓会の募金活動」。急いで日米教育委員会の伊藤さんの協力を仰ぎ、ファンドレイズの歴史や種類、実績などを教えていただいて、早朝の羽田を発った。

ベテラン日本が若い同窓会に言えること

モンゴルのチンギス・ハーン国際空港から、会場となる、これまたチンギス・ハーンホテルに到着した私は、各国から集った会議参加者の若さに驚いた。日本、韓国、シンガポール、ロシア、中国、タイのほか、カンボジア、ラオス、ミャンマー、東チモール、ベトナムからやってきた、フルブライトやIVLP²、SUSIなどの国務省プログラムの経験者で、ほとんどが20代の大学生や大学院生、若き社会人であった。

その夜、韓国、カンボジアからの参加者を誘いあって近所のウクライナ(!)レストランに繰り出したが、彼らはみな、長旅にも関わらず無邪気にはしゃぎながらも、成長する自国をより発展させるのは自分たちであるとの強烈な自負と自覚をもって、同窓会活動を語っていた。

そんな若い人々に、60年の歴史を誇る日本のフ



モンゴルで発表する筆者

ルブライトプログラムや同窓会活動の何を語るのがよいのか。設立5年、10年という段階にある彼らに、いくら成功事例だからと財政面での成功だけを語っても、ピンとこないに違いない。これから聴衆たちが経験していくであろう同窓会の発展をイメージしてもらうことがよいのではないかと考え、ガリオア時代から発展してきた同窓会の来歴に沿って募金活動を紹介することとし、1) 日本では同窓会の組織化以前に、アルムナイ個人個人による、お世話になったアメリカ人や米国への恩返し気持ちから募金が始まったこと、2) その後、順調な日本の経済成長とともに募金活動も発展していったこと、3) そうした活動の成果が「フルブライト記念財団」として安定的に保守されていることを紹介したあと、4) 社会が成熟して低成長期に入った日本が直面する課題は、会員数の減少とそれに伴う財政的課題であることなどを説明し、5) 先輩同窓生による社会的・財政的な遺産をどのように継承し、それを少ない人数で新しい時代にあった形で発展させていくかがカギであると結んだ。

同窓会は何のために存在するか

自席に戻ると私の隣のシンガポールの代表が、日本の事情はよくわかると言ってくれた。彼はキム・シアさんというベテラン弁護士であり、シンガポールのフルブライト同窓会創立メンバーだ。現在はシンガポールのハーバード同窓会長も務めているという。シンガポールでは早くも1946年にフルブライトプログラムが始まっており、自国の成長を支えた

人材の多くがフルブライターであったという。

そんな彼の経験に基づく見識は、私の発表に先立つ第1セッションから遺憾なく発揮されていた。第1セッションは「同窓会を定義する」と題するグループ討議となっており、5~6人ずつ7つのテーブルに分かれて議論した。シア氏は、参加国のうち唯一英語を母国語としている国の弁護士だけに餅は餅屋である。「同窓会は共通の経験を持つ人々が自主的に集まって、その力を結集し、自らの学びを社会に還元していくために存在する」と、きっちりまとめてくれた。「同窓会活動にとって非常に重要なカギは？」との第二の問いかけに対しても彼の滑らかな口調は変わらない。「活動に楽しさ (fun) があること、若い層や新しい才能を呼びこむこと、オーナーシップを持つこと」と明解だ。

社会人として多忙を極める若年会員をどう呼び込むかについては、いろいろなコメントがあった。「理事会に2人の若い役員を必ず入れるアフーマティブ・アクションを導入する。1人では孤立するかもしれないが、2人にすることで若い世代の声が直接とどくようにする」という案には多くの人がうなずいていた。

ほかに二つ興味深い事例が紹介された。ひとつは、シンガポールのハーバード同窓会の試みで、若き弁護士と法曹協会の長、起業家のタマゴたちと成功した企業人、といった組み合わせでラウンドテーブルの茶会を開く、いわば「ようこそ先輩、フルブライト版」だ。大先輩に学ぶことでフルブライターの世代間のコミュニケーションを増やし、自然に若い同窓生を仲間に組み入れていこうというものだが、ここで大切なのは、企画運営をすべて若手に任せてしまうことだという。主催者としての当事者意識を持って、自分たちの手で自分たちのために発案してもらうのがミソだ。

もうひとつは、カンボジアのダリー・デクさんが紹介した大胆な事例だ。カンボジアのフルブライトアソシエーションは1990年代初頭に設立され、彼女もボストンから帰国した08年から理事会メンバーとして活動してきたという。しかし、このコミュニティを社会変革の原動力としてパワーアップすべく、フルブライト・アソシエーションと、米務省プログラムに参加した学部生たちによる同窓会とを合併させ「カンボジア・フルブライト=学生ステートアルムナイ・アソシエーション (FUSAAC)」を発足させたというのである。

フルブライトブランドに自負もあれば、こだわりもある世代との融合は決して簡単ではないように思

えるが、会員間に国家再建という共通目標があるからだろう、その点の不安はさほどない様子であった。この「合併」により、多様な経歴や職業の若年層が、フルブライターとともに活動できるようになり、社会活動に一層弾みがついているそうだ。

日本の同窓会活動は、理事会がきちんと機能しているし、セミナーもあれば、ゴルフ大会もあり、記念グッズを作ったり、世界的にみても突出した成功例に違いない。財政面でも活動内容でも、ガバナンスにおいても、日本のフルブライトアソシエーションがいかに圧倒的な存在であるかを相対的に知ることができたことは、私にとって最大の収穫であった。

同窓会活動と米国の外交

今回の強化会議には東アジア太平洋各国から平均3名ずつが招聘された。会場は治安のよい高級ホテルで、会議用バッグや資料・備品も米国での会議なみにそろっていたし、なんといってもモンゴルの社会や文化を余すところなく紹介しようという意思がプログラムのそこかしこにあふれていた。

初日のディナーは、首相公邸での伝統料理。そこでは、モンゴル史の講演や、馬頭琴と一人で二つの音程を发声する「ホーミー」の演奏、さらには極度に身体が柔軟な女性の曲芸まで披露された。また、翌日は郊外に移動してのゲル宿泊体験。草原に覆われたなだらかな丘陵と薄暮の月を背景に乗るラクダの光景は、まさに「月の砂漠」そのものだった。

盛りだくさんのプログラムで総勢50名を招へいしての会議を、モンゴル米務省アルムナイアソシエーション (MASA) が単独で実施するのは容易なことではないはずだ。共催者である米務省はどのような役割を担っているのか気になり、ワシントンDCから来ていた米務省の同窓会オフィスディレクター、リサ・ハイブロンさんに聞いてみた。「今回はMASAから会議の提案があり、それがよい企画だったので米務省も予算をつけて協力したので」とのことだった。そこで会議資料の中にMASAのパンフレットが入っていたことを思い出し取り出してみた。

そこには、モンゴル国には1989年以来米務省の各種交流プログラムに参加した人が延べ700人ほどおり、そうした同窓生を組織化したのが2007年9月だとある。そのミッションは「米国とモンゴルとの相互理解の促進、同窓生によるモンゴル国や社会に対する貢献」。一見、見過ごしがちな一文だが、会長を務めるジャンガルサイハーン氏が会議の開会式で話したことを思い出し、モンゴル同窓会の覚悟と

使命感のようなものを理解した気がした。

ジャンガルサイハーン氏は今やテレビやラジオで番組を持つ著名なエコノミストであるが、ソ連時代のモスクワ大学に国費留学して首席で卒業、その後は米務省のプログラムで米国留学してMBAを持つという、まさに冷戦時代の文化教育政策に翻弄されたエリートの一人である。

彼は、開会式での挨拶でこう述べていた。「われわれは、民主化したあとも、政治的安定と経済発展とを同時に追求するという大変困難な道を進んでいます。そしてそれを成し遂げるには、大きな励ましとリーダーシップが不可欠です。社会に変化を起こす人々がMASAに属するアルムナイたちなのです。ガンジーは言いました。変化を求めるなら、あなたがその変化となれ、と。」

グローバル・アルムナイの強化

政治的・経済的な成長の只中にある各国のために、今後、日本の同窓会ができることがあるとすれば、東京フルブライト・アソシエーション (TFA) の経験を「ベストプラクティス」として分かち合うことくらいかもしれない。だが、グローバルな同窓会事情はもっと進展しているようだ。米務省は2001年、米国政府プログラムを経験した世界中のアルムナイを一つのコミュニティとしてつなげるGlobal Alumni構想として「State Alumni: Your Global Community」という会員向けウェブサイト (SNS) を開始した。

2011年2月、同ウェブサイトで世界中に散らばる、あらゆるプログラム (フルブライト・プログラムもその一つ) の同窓生を対象に、共同研究や活動企画への助成を行う「インゲージメント革新基金 (AEIF)¹⁾」が発表され、全世界から寄せられた700以上の応募の中から、「青少年模擬国会プログリーポーター育成プロジェクト (ロシア)」「大学における民主化リーダー推進 (エジプト)」「障害者の就労支援 (モンゴル)」など38プロジェクトが採択されている。

また、こうした情報が広く同窓生に共有・還元されるよう世界中の同窓生に永久アカウントが付与されている。つまり本誌の読者ももれなく一つのアカウントが提供され、このサイトにアクセス可能なのである。

ネットでつながる同窓会の将来像

こうした動きを知ってはいたものの、Global Alumni構想が各国の同窓会活動と連動するとはどういうことか、今回の会議で直接見聞きすることが

できた。

たとえば、今回の会議の一つの目玉である、グループワーク。これは「民主主義と人権」「グローバルヘルスと教育」「若年同窓生のリーダーシップと関与促進」という3つのテーマに分かれて、そのテーマの向上のために「東アジア・太平洋地域」で協働するための企画コンテストであった。今後1年間で達成可能な現実的なプランで、しかも地域ぐるみで力を発揮できるものに対し2000ドルの予算を供与するというのだ。

結局、優勝を勝ち取ったのは大学生が中心のグループによる「同時ボランティアデイの実施」。出身7カ国がそれぞれに抱える社会問題について、それぞれの同窓生・同窓会が中心となって自国の大学生たちに呼びかけ、7月4日に同時にボランティア活動を展開し、それをネット中継で一元化して共有しようというもの。準備も実施もすべてはState Alumniのサイトを使ってやり取りする。「交通事故死者が増加の一途をたどっているから、交通ルールの啓蒙活動を全国でやるわ (カンボジア)」「国際結婚が増え伝統的な自国文化を知らない人が多い。何をもって自国民というのか、文化の融合を図る日にしたい (韓国)」「内向きの学生ばかり。外へ目を向ける大切さを知ってもらう日にする (どこかおわかりですね)」など各国事情がてんでんばらばらに詰め込まれているものの、ひとつのムーブメントを共有すること自体にワクワクしている学生たちを見ると、グループ作業の目的は十分に果たせたことが分かる。

ほほえましくさえ見えるこうした若きリーダーたちの無邪気な試みを、私たちは経験豊かな長老として遠くから見守るのか、あるいはそうした動きに日本の若年層を取り込んでいくのか——成熟した日本社会のフルブライト同窓会が、世界各地の多種多様な、そして社会改革の意欲に満ちた国の同窓会とどう付き合っていくのか、そろそろ真剣に考えるべき時が来ているのかもしれない、と痛感した会議であった。

最後に、この会議の出席にあたり快く私を送り出してくれた原田会長と、出発までの短い期間に多くの資料をまとめて提供してくださったJUSECの伊藤さんに心から御礼を申し上げたい。

1 2010年に始まったStudy of the U.S. Institute on U.S. Foreign Policy for East Asian Student Leaders Programと呼ばれる学部生対象の5週間のプログラム。日本・韓国・中国の学部生がアメリカの大学で講義などを通じてアメリカの外交政策に関する理解を深め、問題解決能力を向上させることを目的としている。
2 International Visitor Leadership Program。1953年には、日本人が初めて参加。若きリーダーのための短期交流プログラムで、比較的若い社会人を対象としている。
3 Alumni Engagement Innovation Fund

同窓生の短信 & 掲示板

国際政治学を教える

岡垣 知子 (1999 University of Michigan)

4月より獨協大学で国際政治学を教えています。長年、夢と希望を託してきた日本の大学教育に携わることができ、やりがいのある毎日です。

受動喫煙防止対策

宮本 順伯 (1960 Michael Reese Hosp.)

世界の受動喫煙防止対策をそれぞれの国で検証し、その最新情報を英語と日本語で発信しております。観光案内、鉄道記事もあり、写真は好評です。ぜひアクセスして見てください。

「禁煙席ネット」主宰 宮本順伯

<http://www.kinenseki.net/>

グーグル検索で「禁煙席」または「japan smoking ban」と入力されれば一番上に表示されます。

エジプトとリビア

先川 信一郎 (1987 M.I.T.)

北海道新聞で紙面審査委員をしています。

5月の始めに10日間、エジプトとリビアを再訪しました。独裁政権崩壊後のエジプトは、自由ない雰囲気です。

でも、リビアはカダフィ政権との内戦が激化し、暗雲が漂っていました。反政府軍の士気は高く、勝利はもうすぐ。

念願の南半球へ

小浪 博英 (1971 Harvard U.)

新刊発行

「まちづくり政策実現ガイド—その鉄則とワザ—」(ぎょうせい)

海外旅行レポート

念願の南半球、パースとケープタウンに行きました。パースでは観光バスに乗ってWave Rockという逆巻く波のような岩山とPinnaclesのカルスト地

形のような不思議な景観を見て、ケープタウンではCape of Good Hopeに行きました。残念ながら強風のためTable Mountainには登れませんでした。インド洋を東のパース、西の喜望峰の両側から眺めることができ、大満足です。喜望峰の沖合には今でも何百艘の船が沈んでいるそうです。

教授のお孫さんへ

本多 虔夫 (1959 Johns Hopkins U.)

私は1959年ジョンズ・ホプキンス大学へ留学しました。医学部神経内科Magladery教授に可愛がって頂き、先生の夏の別荘でご家族とともに過ごさせて頂いたのは忘れ得ぬ思い出です。

教授夫婦が亡くなられた後は子供さんと交流を続け、親に先立たれたお孫さんの大学進学を経済的に援助することができました。

先月無事大学を卒業したと、お孫さんからとても良い感謝の手紙をもらい、深い感慨を覚えました。

自分史を出版

田島 重雄 (1953 U. of Minnesota)

出版書名「ビルマ戦の生き残りとして」連合出版社
これは昭和18年(1943年)、学徒兵として応召、ビルマに派遣され、生死を分けた数々の体験、復員後のフルブライト留学、帰国後の大学での国際交流、ユネスコパリ本部農業教育部長他、国連食糧農業機構、アジア生産性機構などを通じる国際協力等の体験について記述した自分史。

安全・健康生活を

齋藤 むら子 (1962 Columbia U.)

私はコロンビア大学大学院(1962-1965)の留学生でした。帰国後外資系企業、国立及び私立大学大学院教授を歴任し、現在は、NPO法人活動を中心に安全・健康生活に関する研究資料や関連専門情報を各地に発信しています。近況としては、学術論文以外にもRedesigning Innovative Healthcare Operation and the Role of Knowledge Management (2009)という本をIGI Global社から出版しました。東日本大

災害をきっかけに安全や健康に関心のある方々と、多分野の専門研究者達とのコラボレーションを大切にしてゆきたいと努力しております。

オバマの説得コミュニケーション

鈴木 健 (2006 U. of Southern California)

2006-2007年に南カリフォルニア大学アネンバーグ・コミュニケーション学部客員教授時代に集めた資料を基に、昨年、『政治レトリックとアメリカ文化—オバマに学ぶ説得コミュニケーション』(朝日出版社)を上梓しました。アメリカでは「公的な説得の技法としてのレトリック」(Rhetoric as the art of public persuasion)の研究者によって、政治コミュニケーション論という学問分野が発展してきました。1960年から2008年まで大統領選の歴史やデータも入れてありますので、オバマの再選キャンペーンに興味がある方は是非、ご覧ください。

お元気ですか？

飯塚 鉄雄 (1953 U. of Iowa)

時の流れにはついて行けない。1953年7月プロペラ機で占領下の羽田を発ち、途中3.11被災地上空松島で台風に遭い、主翼が上下に大きく揺れ、折れそうに見えた一行の一人が、「アメリカは俺たちを……」と言って恐怖におびえた時からもう58年である。大雨の羽田から、アリュウシヤンのシメア島で燃料補給、シャトル市のタコマ空港に無事到着したのだが、その時の7人？は誰で、今どうしているのか知りたいのだが、無理な願いであろうか？

それから「カンサス大学」でオリエンテーション、隣のミズリー州出身のトルーマン大統領に会って握手をして貰い、希望した「コロンビア大学」に行ったのが、合衆国首都の在るコロンビア地区かと思っていたら、ニューヨーク州のNEWYORKでありびっくり仰天、あの時も其処には多分7人しかフルブライト大学院留学生はいなかったが、皆さん元気であろうか？ またカンサス大学オリエン友達の、山下・南川・富川・上田さん他、「お元気ですか？」私はあい変わらず90歳の今も、病気除けに毎週車でゴルフクラブへ通勤中である。 tmesi@msn.com

博士学位論文出版

星野 靖雄 (1981 Rutgers U.)

2011年の9月に、23年前の論文博士の学位論文

“A Study of Corporate Mergers in Japan”をドイツの出版社 VDM Verlag Dr. Muller から、誤字等の修正とその後の追加論文リストとともに出版しました。amazon.comならドルで、amazon.co.jpなら円で直ぐに購入できます。

司法のあり方について

西野 喜一 (1992 U. of Washington)

10月に論文集『司法制度改革原論』(悠々社、4000円)を出しました。司法のあり方や裁判員制度・陪審制などを検討したものです。私にとっては司法に関する4冊目の本ですが、大書店の法律書コーナーならあると思います。こういう分野に興味がある方は、書店で手に取って見て下さい。

著作集が完結

星野 命 (1955 Iowa State U.)

2011年6月に『星野命著作集全3巻』の第Ⅲ巻を出版し、昨年2月に出版した第Ⅰ・第Ⅱ巻をあわせて、全集が完結いたしました。

第Ⅰ巻 人間性・人格の心理学 329頁

第Ⅱ巻 異文化間教育・異文化間心理学 330頁

第Ⅲ巻 心理学 その境界を越えて 369頁

いずれも、北樹出版刊。3,300円+税。

第Ⅲ巻の第2部アカデミックエッセイの第2章に、米国におけるフルブライト体験が綴られている。

海外調査のために

米原 あき (2003 Indiana U.)

共著書『海外調査研究の学び方：アジア・アフリカ研究の基礎』(鴨川明子編、勁草書房、2011年秋出版)にて、「第10章 『人間の福祉』への計量的アプローチ：『フィールド(質)』と『データ(量)』の往復運動から」を執筆しました。タンザニアでのフィールドワークの経験と、専門分野である社会統計の方法論の融合を試みた章になっています。これから海外調査を行う学部学生・修士課程院生にお勧めの一冊です。お手に取って頂ければ幸いです。

留学50周年をみんなで祝う

高橋 淳一 (1961 U. of California LA)

(1961年にフルブライトとして留学された4人が、その半世紀記念を東京とボストンで家族とともに祝

われたとのこと。そのレポートです。)

Though we are all in the class of 1961 Fulbright scholars, Michio Ihara (Geidai-MIT), Ken-ichi Hayashi (Kohnan-USC), Susumu Kuno (Tokyo-Harvard) and Jun-ichi Takahashi (Waseda-UCLA) are from four different academic and professional background. Michio Ihara a sculptor, Ken-ichi Hayashi a tv producer, Susumu Kuno a linguist and Jun-ichi Takahashi a film producer. First, us Tokyoites Hayashi and Takahashi decided to celebrate our 50th anniversary with our better halves in September in Tokyo. Then in November Takahashi and his wife will fly to Boston to celebrate another 50th anniversary with two Bostonian friends, Ihara and Kuno and their wives hosted by Yuriko Young, Takahashi's daughter who lives there. The Takahashis are also planning to celebrate the Thanksgiving with his daughter's family. After 50 years Michio Ihara and Susumu Kuno who have lived and worked in America all these years have turned Americans. Takahashi's daughter Yuriko helped the birth of Hayashi's daughter Mikiko's first child when Mikiko was staying in Boston with her Harvard fellow medical doctor husband from Tokyo University. A nice friendship story of us four Fulbrighters that's lasting half a century on both sides of the Pacific.

「ニューヨークタイムズ」に投稿

猪口 孝 (1983 Harvard U.)

(東日本大震災について「ニューヨークタイムズ」紙に投稿された文章に対して、さまざまな反応があったとのことです。)
Takashi Inoguchi joined the New York Times debates on March 15, 2011, on how to assist those negatively affected by the earthquake, tsunami, and nuclear disasters. Since this "Instill Hope in the Young" essay appeared on that date, a number of schemes have been announced including AFS Japan "Support Michinoku scholarship", I am very pleased to see those were the real and tangible impacts of my essay.

円とドル

別府 祐弘 (1989-1990 The Wharton School of U. of Pennsylvania)

2010年4月より上武大学大学院経営管理研究科教授。退職と移籍のご挨拶を兼ねて簡単な自分史を纏めさせていただきました。「別府祐弘」と検索窓に入ると、「履歴と業績 別府祐弘」が、すぐに出ます。簡単に検索できますのでご覧いただけますれば幸いです。フルブライターとして派遣して頂いたことに対する感謝を込めて、その中から拙稿「日米間の通貨ヘッジ戦略について」(2003年、10月)を紹介させて頂きたいと存じます。

最適化とファイナンスの分野のパイオニアとして、それぞれ偉大な貢献をした、George B. Dantzig教授とHarry M. Markowitz教授(注)の参加を得て、1989年11月10～11日、“財務的最適化コンファレンス”が、ペンシルヴァニア大学ウォートンスクールの1206番大階段教室に熱気溢れる超満員の聴衆を集めて開催された。

同年9月よりフルブライトスカラーとして、たまたま同校で在外研究中であった筆者は、1972～1974年のスタンフォード大学経営大学院客員研究員(及び客員助教授)時代以来両教授と面識があった為か両教授の間に席を与えられ、Program Chairman, William T. Ziemba, UBC教授のコメンテーターを申し付けられる破目に陥った。本稿は、この時の研究報告をめぐっての討論と考察によるものである。

いわゆる1ドル100円時代が本格的に訪れる前、しかもそれが本当に現実となることが未だ確信されていなかった時期に発表されたのが、WILLIAM T. ZIEMBAによる「日米間相互投資における通貨ヘッジの戦略」という研究報告であった。

ここで扱われる先物・オプションは、その歴史が浅いことから、経験的に得られるデータは非常に限られるが、この論文では実際の生のデータが使用され、そのことがユニークな強みとなっている。また、円がドルにたいして100円もしくはそれ以上に高くなるという大胆な仮定のもとに考察されているものである為、いまだに驚くべきタイムリーさを失ってはいない。

(注) H.M.マーコビッツ教授は、1973年11月にスタンフォード大学での講演の後、パロアルトのW. シャープ教授宅での盛大な歓迎会に出席された。そ

の席で、当時師事していたW.シャープ教授(1990年、ノーベル経済学賞受賞)より親しく紹介されたのが筆者との馴れ初めであったが、その後、1980年頃、バーバラ夫人と武蔵野市の拙宅を訪問して下さい、それ以降今日迄文通を続けさせて頂いている。

このコンファレンスでも、再会を希望されたバーバラ夫人を同伴されて、夕食会や、ダンツイッヒ教授のお誕生パーティに招いて下さったり大変お世話になったので、在外研究を了えて翌1990年9月20日頃、帰国前の挨拶に同教授をジャージー・シティーに訪れた。そしてハドソン河畔の眺めの良いレストランで親しく昼食をとりながら、「先生のきわだってオリジナルな御業績からすれば、当然ノーベル経済学賞候補者になっていられるのではないのでしょうか」と思い切って聞いてみた。「大分以前に候補になっていると言われたことがあり、さすがに落着かないので、発表の当日は朝からスーパーマーケットでぶらぶらしていましたが、やがて、私の学位論文がペンディングになっている間に、同類の業績を発表されたトービン教授が受賞されたとのニュースが飛び込んで来ました。その時以来私は永久にノーベル賞には縁が無くなってしまったのですよ。10月1日より東京大学で半年間講義することになっているので、また東京ですぐ会えますね」と言われ、私は東京での再会を約して帰国した。

しかしその直後の10月初旬、「今年のノーベル経済学賞はハリー・マーコビッツ…」なるホット・ニュースが世界を駆け巡ったのである。そこで私は「受賞おめでとう!!この大嘘つき!」との祝辞カードを添えた花束を吉祥寺駅の花屋から届けさせたのが、つい昨日のことにように思い出される。その後このコンファレンスの成果が、FINANCIAL OPTIMIZATIONなる書物にまとめられ、Cambridge University Pressより出版されたが、彼の受賞のお陰か、程なくSoft Cover Editionが出て、その後世界各地に新設された大学院金融工学コースでも教材として使用されていることは真に喜ばしい限りである。



【訃報】

開原先生の思い出

長坂健二郎
(2006-10年度会長)



本年1月、開原成允先生の訃報に接した。享年74歳、早過ぎるご逝去が惜しまれてならない。

先生は東大教授、国際医療福祉大学院長を歴任されるなど、常に我が国医療の先端を歩まれたが、若き日には、フルブライターとしてジョンズ・ホプキンス大学に留学された事もあり、そこでの貴重な経験がその後の一生を大きく左右した、と述懐しておられた。

人一倍「御恩返し」のお気持ちの強かった先生は2004年にフルブライト同窓会の会長を引き受けられ、卓抜したリーダーシップを発揮された。翌年4月は故フルブライト上院議員の生誕百周年に当たる為、令夫人を日本にお招きして、盛大な記念行事を実施する事が出来た。この快挙の陰には日米教育委員会の全面のご支援に加え、開原会長のエネルギーシユなご活動があった事を忘れてはならない。

また、記念募金活動の成功も開原会長の敷いた路線の上に生まれたものである。それまで募金活動は特別な場合を除き、主として会員を中心に行われて来たが、開原会長は上記百周年の記念行事の一環として、対象を一般の企業団体にまで広げ、出来る限り多くの資金を集める事を主張された。結果は大成功で、会員のみならず、多数の企業団体の善意をも結集して、当初の目標を大幅に上回る浄財を集める事が出来た。

開原先生が会長として活躍されたのはわずか一期2年間であったが、その間に残された業績は極めて大きい。私達は今後、先生の「御恩返し」の精神を受け継ぎ、活動を続けて参る所存である。

[NEWSLETTER Vol.23] p.32

阿岸明子様、留学年度と留学先のご訂正

(誤) 1967 California Inst of Tech

(正) Sacramento State U. (1967-1969, MA degree)

U. of California, Los Angeles (1969-1974, Ed. D)

事務局からのお知らせ

松島たかね
1993 Columbia U.

○2011年の活動は、3月11日の大震災の影響を抜きにしては語れません。

TFAでは、全国の同窓会とのご協力のもと、東北同窓会への義捐金を募りました。7月14日に原田敬美会長が仙台を訪れ、佐々木公明東北同窓会会長に1,078,815円の日録を手渡しました。ここに御報告いたします。

恒例のチャリティゴルフ大会も、震災後の経済状況なども踏まえ、今年度は中止とさせていただきます。しかし、このゴルフ大会で毎年1~2名分の奨学金が賄われてきた意義は大きく、フルブライト奨学金の主旨を理解していただくためにも、活動は継続、来年度は10月29日に開催の予定で準備を進めております。他にも、中止となった恒例行事がございますが、今後、復活の方向で準備しております。

○来年は、日本でのフルブライト・プログラムが始まり60周年となります。2012年5月25日・26日の両日に記念事業を開催するべく、60周年実行委員会、各担当委員会の皆様が準備を進めています。今回は、ノーベル賞を受賞され、フルブライターでもある根岸英一さんをお招きし、シンポジウムの「基調講演」や「若者との語り」などを行っていただく予定です。その他にも、様々な内容を企画しておりますので、今後のお知らせをどうぞ、楽しみにお待ちしております。

○フルブライト奨学金の募金活動を効率化・恒久化をはかるべく1986年に設立されました財団法人日米教育交流振興財団は、本年2011年11月1日に、公益財団法人に移行し、寄付優遇の対象となる「特定公益増進法人」になりました。個人が特定公益増進法人に対して寄付をした場合には、その寄付額から2,000円を差し引いた金額をその個人の所得から控除できるようになりました。これまでと違い、募金額の敷居がぐっと低くなりましたので、この機会にご利用いただけましたら幸いです。

Mrs. Kiyo Yamada Stevensonのご遺志により、1万ドルのご寄付を頂戴しました。

本年7月に米国から1万ドル小切手が事務局に送られてきました。「Mrs. Kiyo Yamada Stevensonからのご遺志により、フルブライト・アソシエーションへの寄付をしたい。」と書かれた代理人のお手紙が同封されており、ありがたく頂戴することにいたしました。

Kiyo Yamadaさんは1954年に英語教育を学ぶ為、フルブライターとしてミシガン大学に留学、その後、Charles Stevenson氏と結婚、米国で語学教育に従事されてきましたが、2010年12月27日に亡くなりました。ご冥福をお祈りいたします。

KIYO YAMADA STEVENSON (Age 88)

Passed away on December 27, 2010. Mrs. Stevenson was born in Tokyo, Japan. She attended Women's Christian College and the Tokyo College of Education and Literature, B.A. 1948. She came to the U.S. as a Fulbright Scholar to the University of Michigan and received a M.A. in Linguistics in 1955. She had a long and illustrious career with the U.S. State Dept. Her Husband of 50 years, Lt. Col. Charles Stevenson, died in 2006. Her wish was to be interred with her husband at Arlington National Cemetery, in view of the Pentagon, the Washington Monument and her beloved Cherry trees. In lieu of flowers, donations may be made to Capital Hospice, 209 No Gibson St, NW, Leesburg, VA 20176.

Published in The Washington Post on March 13, 2011



東京フルブライト・アソシエーション
〒100-0014 東京都千代田区永田町2-14-2
山王グランドビル416
TEL: 03-3503-1841 FAX: 03-3503-0758
E-mail: fulb@fulbright.or.jp
http://www.fulbright.or.jp
(HPは、フルブライト・ジャパンのHPとリンクしており、日米教育委員会から米国フルブライト・アソシエーションを経由し、グローバル・フルブライト・ネットワークにアクセスが可能です。)

アメリカン・グランティー歓迎会



日本人フルブライター歓送会



お詫びと訂正

「NEWSLETTER No.24」の本文中に以下の誤りがありましたので、訂正してお詫びいたします。

東京フルブライト・アソシエーション

11 ページ 2011/2012 年度役員

顧問:佐藤ギン子様のお名前が漏れていました。

20 ページ上段:2011 年度日米教育交流振興財団奨学生冠名リスト

HARRIS Tobias S.様の出身大学(最終)名

【誤】M.I.T. (Science)

【正】M.I.T. (Political Science)

21 ページ5段落:

【誤】吉田工業株式会社(YKK) 吉田社長

【正】YKK 株式会社 吉田代表取締役会長 CEO

34ページ「円とドル」別府祐弘様の留学校

【誤】The Warton School of U. of Pennsylvania

【正】The Wharton School, U. of Pennsylvania